

日本全国の水の偉人リスト 172人				2019年4月～2020年20年調査			
-------------------	--	--	--	--------------------	--	--	--

はじめに
4月29日に開催する火と水のプロジェクトとし熊野大社鑽火殿で起こした火をいただき、岩坂御陵・神魂神社・切通し・剣神社・周藤彌兵衛翁像を火で繋ぐ聖火リレーを開催しました。
八雲ゆう人会の鯉のぼりとあわせ、周藤彌兵衛翁をはじめ世界の水の偉人を称え1000個の灯籠に名前・功績を記載し熊野大社の火を灯し周藤翁像と意宇川と鯉のぼりと灯籠で悠久の河を演出。
同年4月に東京で開催された日本ビジネスインテリジェンス協会東アジア友愛フォーラムを経て、7月に中華農耕文明の発祥地とも言われる楊凌・西安から発表できる可能性が見えてきました。
また、北陸農政局による九頭竜川下流農業水利事業として福井県を流れる九頭竜川の監視管理を2019年4月より範囲を拡大し開始しました。

黒字 農林水産省調査による水の偉人 56人
2019年4月24日小松電機産業調査による水の偉人 116人

					172人			
	エリア	功績地		出生地	人物名	功績	灯籠記載功績文 (130字～150字以下)	生没年
0	北陸信越	福井県	坂井市	福井県坂井郡鳴鹿村	酒井利雄	坂井郡8千町歩の用水取入口であった鳴鹿大堰所の改良工事を計画、戦争で中断したが、戦後、昭和22年国営九頭竜川沿岸農業水利改良事業を5ヶ年計画で施工。24年より本格的に着手。そして28年に待望の通水となり、翌年に竣工した。	土木工事を主とする会社を創立した酒井利雄氏は、坂井郡八千町歩の用水取入口であった鳴鹿大堰所の改良工事を計画、戦争で中断したが、戦後、昭和二十二年国営九頭竜川沿岸農業水利改良事業を五ヶ年計画で施工。二十四年より本格的に着手。そして二十八年に待望の通水となり、翌年に竣工した。	1891年～1969年
1		北海道	札幌市	アメリカ合衆国 オハ イオ州	エドウィン・ダン	真駒内牧牛場における水の安定供給のために建設を提案し、1879年に完成した真駒内用水は、のちに水田の灌漑用水としても利用され、周辺地域における稲作の定着に大きく貢献した。	真駒内牧牛場における水の安定供給のために建設を提案し、1879年に完成した真駒内用水は、のちに水田の灌漑用水としても利用され、周辺地域における稲作の定着に大きく貢献した。 北海道における畜産業の普及・発展に努め、酪農・乳製品・食肉の加工技術、大型農具を用いて農作業を行う技術などを伝えた。	1809年～1880年
2	北海道	北海道	石狩市	岡山県岡山市	岡崎文吉	岡崎式河川補修の基礎技術である単床式ブロックは、岡崎没後25年を経た1970年頃の石狩川河口付近の補修に採用されており、またミシシッピ川流域の護岸工事にも使われている。	近代日本の河川治水は捷水路方式を基本としてきましたが、岡崎の唱えた「自然主義」に基づく治水方式は近年の環境保護思想とともに再評価され千歳川河川整備計画に盛り込まれました。岡崎式河川補修の基礎技術の単床式ブロックは、石狩川河口付近の補修に採用され、またミシシッピ川流域の護岸工事にも使われています。	1862年～1928年
3		北海道	小樽市	高知県	廣井 勇	広井勇博士は防波堤に当たる波の強さを測定し、防波堤に使うコンクリートの性能を試験し、日本初のコンクリート製の外洋防波堤を建設しました。小樽港の成功によって日本の近代港湾の整備が進みました。そのことから、小樽港の防波堤、特に北防波堤は重要文化財と同じくらいの価値を持つと評価されています。	広井勇博士は防波堤に当たる波の強さを測定し、防波堤に使うコンクリートの性能を試験し、日本初のコンクリート製の外洋防波堤を建設しました。小樽港の成功によって日本の近代港湾の整備が進みました。そのことから、小樽港の防波堤、特に北防波堤は重要文化財と同じくらいの価値を持つと評価されています。	1872年～1945年
4		青森県	十和田市	花巻市	新渡戸傳	新渡戸稲造の祖父、米の生産を安定させ農民たちの生活を救うため、奥入瀬川から水を引き、不毛の三本木原台地に2,500haの水田を開発する計画をたてました。資金は、藩からの出資金のほか沢山の出資者を募り、傳の私財も充てられました。	「三本木原台地」と呼ばれた十和田市中心は荒れ野原、この土地の開拓に着手したのが新渡戸稲造の祖父、新渡戸傳。 米の生産を安定させ農民たちの生活を救うため、奥入瀬川から水を引き、不毛の三本木原台地に二千五百ヘクタールの水田開発を計画。藩からの出資金のほか多くの出資者を募り傳の私財も充てられました。	1793年～1871年
5		青森県	五所川原市	北津軽郡中里町	武田源左衛門	翌元禄4年には、五所川原堰の工事担当を命ぜられ、藤崎村から五所川原村まで長さ1824間、幅平均2間半の堰を開通させたほか、金木新田の開拓や治水に大いに力を振るい、数々の功績を挙げました。	江戸時代の奉行だった武田源左衛門は、五所川原堰の工事担当を命ぜられ藤崎村から五所川原村まで、長さ千八百二十四間、幅平均二間半の堰を開通させたほか金木新田の開拓や治水に大いに力を振るい数々の功績を挙げました。 武田源左衛門にちなんで武田村と名付けられた地域は武田地区と呼ばれるようになりました。	1653年～1712年
6		青森県	五所川原市		徳田伝兵衛	徳川中期。金木新田開拓の功労者。元禄11年(1698)より、水利関係の奉行として、長さ1381間(約2.2キロ)の川倉川、ならびに長さ2210間(約4キロ)のオノ神川開削を指揮しました。また藤枝溜池を造成するとともに、岩木川の堤防築造などにも尽力しました。	徳川中期。金木新田開拓の功労者。元禄十一年(一六九八年)より、水利関係の奉行として、長さ千三百八十一間(約二.ニキロ)の川倉川、ならびに、長さ二千二百十間(約四キロ)のオノ神川開削を指揮しました。また藤枝溜池を造成するとともに、岩木川の堤防築造などにも尽力しました。	江戸中期
7		青森県	五所川原市		鳴海勘兵衛	津軽信政から藩の直営工事の開発派立頭(指揮者)を命ぜられ、五所川原新田15ヶ村の開拓に成功し、五所川原遣初代の代官となりました。また、板屋野木(北津軽郡板柳町)の蔵奉行にも任じられました。 続いて、金木新田18ヶ村の開拓にも尽力し、藤枝溜池(金木町)の築造に協力したり、岩木川堤防の建設にも努力しました。	津軽信政から藩の直営工事の開発派立頭(指揮者)を命ぜられ、五所川原新田の開拓に成功し、五所川原遣初代の代官となりました。また、板屋野木(北津軽郡板柳町)の蔵奉行にも任じられました。 続いて、金木新田の開拓にも尽力し、藤枝溜池(金木町)の築造に協力し、岩木川堤防の建設にも努力しました。	～1721年
8		青森県	五所川原市	五所川原	阿部武智雄	岩木川改修期成同盟会長として岩木川の治水に尽力し、また造林事業にも力を注いだ	岩木川改修の恩人。県会議員時代から津軽の生命線である岩木川の改修事業実施に奔走、明治33年輕1市4郡の県会議員、市町村長、貴衆両院議員ほか有力者に呼びかけ岩木川改修期成同盟会を結成、自ら会長となって政府並びに両院に陳情し、ついに50有余年後の今日まで続けられている一大事業をもたらしました。	1861年～1931年
9		岩手県	奥州市	岩手県	後藤寿庵	当時、水不足により砂漠のようだと言われたこの地に、胆沢川から水を引く「寿安堰」をつくり、豊かな穀倉地帯の礎を築きました	後藤寿庵は、水不足により砂漠の様だと言われた地に、西洋の技術を取り入れ胆沢川から水を引き上げる「寿安堰」を造り、豊かな穀倉地帯の礎を築きました。大正三年、治水の功により従五位が贈られました。昭和六年には壽庵の館だった跡に寿庵廟堂が建てられ、毎年九月十一日には寿庵祭が行なわれています。	1577年～1638年

10	東北	宮城県	石巻市	山口県萩市	川村孫兵衛	治山治水に優れた技術を発揮、政宗の命令で北上川改修工事の責任者となる。	仙台北下の水不足を解消させるべく、広瀬川の上流から支流を作り、その水を地中に染み込ませることで地下水を確保した。この際に作った用水路が現在の四ツ谷用水の原型となった。元和2年から寛永3年に至り、北上川の治水工事を行なって仙台藩の石高を大きく向上させた。また、これによって陸奥北部との海運も発達した。	1575年～1648年
11		宮城県	石巻市	石巻市	石母田正輔	特に水道事業の完成と市制実現の事蹟はまことに偉大なものあり、石巻町制施行以来歴代町長市長中最高の殊勲殊功を樹てた偉大な人材であつた。	上水道の事業規模は町の年間予算の三倍強にも上る百九十万円。起債、補助金を苦勞して引き出しつつも借入額が膨らみ財政破たんを不安視する向きもあったが、正輔は「うまくて安全な水のために設備投資が先行するのはやむを得ないこと」とひるまなかった。結局、上水道は1933年四月、給水を開始。	1861年～1941年
12		宮城県	角田市	角田市	高山善右衛門 （高	大沼干拓と角田上水の大土木事業を成し遂げ、阿武隈川から取水が実現した。功績により「上水」の称号を賜り、高山上水翁と呼ばれる。	百年ほど前の角田市周辺は、阿武隈川が流れているものの、川よりも土地が高く水田に水を引くことがでないため、小さな沼や溜池に頼っていましたが水量が少なく米を十分に作れませんでした。阿武隈川からの取水計画実現を先頭に立って成し遂げた高山善右衛門は、この功績により高山上水翁と呼ばれています。	1863年～1928年
13		宮城県	男鹿市	秋田県	渡部斧松	寒風山山麓の滝の頭湧水から水路を掘削した鳥居長根の開墾、久保田藩の水利、開墾、救済、殖産等の各事業において、多大な功績を遺した	江戸時代後期の老農、農業指導者、農業経営者。 一七九三年、足軽の子に生まれた渡部斧松は、久保田藩において、寒風山山麓の滝の頭湧水から水路を掘削した鳥居長根の開墾や、渡部新村の経営をはじめとして、久保田藩の水利、開墾、救済、殖産等の各事業において、多大な功績を遺しました。	1793年～1856年
14		宮城県	大崎市	宮城県大崎市	鎌田三之助	鹿島台村長に就任、以来10期38年に渡って務め品井沼干拓事業と村政立て直しに尽力した。	鎌田三之助「わらじ村長」はわらじを履いて村内を巡回した為、村民から「わらじ村長」と呼ばれ親しまれた。 特に鎌田三之助が力を入れた事は品井沼干拓事業で、昔は数年に一度、大雨で吉田川などが氾濫し、村民は大変困っていた。それを現在の品井沼のように水害につよくしたのが鎌田三之助です。	1863年～1950年
15		宮城県	白石市		片平観平	私財を投げ打って治水工事を行った。その後、10年の年月をかけ苦難を乗り越えて「蔵本大堰切通トンネル」は完成した。	観平は、大雨のたびに水害に苦しむ白石の人々を救うため、私財を投げ打って治水工事を行いました。大堰に頼らずに白石川からの水を引くための隧道を掘り、年月をかけ苦難を乗り越えて「蔵本大堰切通トンネル」は完成しました。 現在も地元白石の人々は、これを「切通(きんどし)」と呼んで大切に利用しています。	不詳
16		秋田県	男鹿市	オランダ ドルドレヒト	ピーター・F・ヤン	ヤンセン教授の来日を契機として同年の世界銀行および国際連合食糧農業機構FAO調査団が調査した結果、干拓事業の有用性が内外に認められました。	オランダ技術コンサルタントおよび世界銀行顧問として国際的な活躍を展開。 特に八郎潟については昭和二十九年、現地を視察して干拓計画の概要とその有利性を説いた「日本の干拓についての所見」を政府に提言し、さらに数次にわたる来日指導によって事業の進展に貢献した功績は大きい。	1902年～1982年
17		秋田県	大仙市	秋田県大仙市	榊田清兵衛	西山を掘削することになり、1921年(大正10年)着工、1927年(昭和2年)に赤川新川は完成した。	最上川に合流していた赤川は、大雨のたびに水害をおこしていた。田んぼをつぶして赤川の川幅を広げようという計画が考えられた。農家の人は田んぼをなくしては困る。という話しを聞き田んぼをつぶすかわりに砂丘をほって、最上川と赤川を切りはなす治水工事を政府にねがい出て、新しい川の流れをつくる工事が始まった。	1864年～1929年
18		秋田県	昭島市	太平八田字上八田	鎌田孫左衛門	太平地区の灌漑用水を完成させ、これにより目長崎、八田、柳田、広面にかけての広大な荒地が開田された。	荒廃した水源の枯渇を解消するため、太平川から水を引いて灌漑用水をつくることを計画し測量を開始。 文久二年七十歳にして私財を投じ二年三ヵ月後に完成させ、用水路は孫左衛門堰と名付けられた。これにより目長崎から八田、柳田、広面にかけて約十キロメートル、三三五ヘクタールに及ぶ広大な荒地が開田された。	1653年～1712年
19		秋田県	潟上市	潟上市	石川理紀之助	生涯を農村の更生、農家の救済、農業の振興のために捧げ、秋田の二宮尊徳と呼ばれた。	石川理紀之助は、明治時代の農村指導者で「老農」と敬称され、「寝ていて人を起こすことなかれ」の言葉を残したことで知られています。「老農」とは、在来の農法を研究し、これに自らの体験を加えて高い農業技術を身につけた、農業熱心家の人のことを言います。石川理紀之助は、その老農の代表的な人物です。	1845年～1915年
20		山形県	米沢市	宮崎県	上杉鷹山	大倭約令と一緒に行ったのが農業開発です。上杉鷹山は安永元年(1772年)、中国の成功例をまねます。遠山村で藩主が、自ら田を耕す「籍田の礼」をおこないます。農業の尊さ、大切さを身をもって示しました。	十七歳で藩主となり、厳しい藩の財政再建、人々を豊かにする事業に取り組みました。大倭約令と一緒に行ったのが農業開発です。上杉鷹山は安永元年(一七七二年)、中国の成功例を真似ました。遠山村で藩主が自ら田を耕す「籍田の礼」を行い、農業の尊さ、大切さを、身をもって示しました。	1751年～1822年
21		山形県	酒田市	酒田市	阿部永作	15年間雑木の伐採を厳禁し、水源林の育成に努めた。2700町歩の水源林は守られ、そのため北俣村の洪水は少なくなった。	北俣村100年の大計をたてるには、水源林の育成にあると考えた。明治維新後、薪炭材料に奥山の雑木を乱伐し、水源林の重要さを説いても耳を傾ける者は少なかった。これを説得し、15年間雑木の伐採を厳禁し、水源林の育成に努めた。2700町歩の水源林は守られ、北俣村の洪水は少なくなり、田も水で潤うようになった。	1854～1927
22		山形県	酒田市	酒田市	石塚綱吉	その後も苦勞を重ねたが、同村地内に揚水機を設置した。綱吉の熱心な働きで、昭和9年当時、100町歩余のかんがい開墾事業に成功し、荒れていた地は美田となった。山麓に位置するこの水田の収量は、昭和14年度には平野部に劣ることはなかった。この事業の成功によって、経済的に苦しかった村は救済された。	灌漑で畑を田に変えることで生産力を増大し、貧しい村を更生させ豊かにしようと決意。それには動力揚水によって灌漑揚水を確保し、開田することに利便性があると考え、活動を始め、同村地内に揚水機を設置しました。綱吉の熱心な働きで昭和9年当時、百町歩余の灌漑開墾事業に成功し荒れていた地は美田となりました。	1867～1946

23	山形県	庄内町	庄内町	佐々木彦作	干害に苦しむこの地の農民をみて、彦作は新しい堰を造る決意をし、その計画に着手した。最初の計画は失敗したが、事業家吉田寅松によって彦作の夢が明治43年8月実現され、990町歩が開田された。	最上川下流左岸北部の一部では北館大堰の恩恵を受けていたが、狩川・余目・大和・常万・新堀の村々は、昔から水利の便が悪く農民は干害に苦しんでいました。彦作は新しい堰を造る決意し計画に着手、最初の計画は失敗しましたが事業家吉田寅松によって彦作の夢が明治四十三年八月実現し、九九〇町歩が開田されました。	1819～1880
24	山形県	酒田市	酒田市	佐藤文治	榊田や久松、佐藤文治らの努力が実り、大正10年6月、西山開削の工事が実施された。工事費292万円余、労働者延べ2万7700人余を投入して、昭和2年7月に延長2800メートルの赤川新川が開通した。	「佐藤氏紀功碑」の碑文に「佐藤文治氏奥井排水溝及赤川京田川堤防事業奏効以至今日多依氏之力我等慕其德有志相謀建一碑石以表微意」とある。奥井排水溝と赤川、京田川堤防事業の完成が佐藤文治に負うところが大きく、その徳を称えている。文治はこの地方の治水に生涯をかけた人である。	1870～1934
25	山形県	鶴岡市	山形県鶴岡市	木村九兵衛	水不足解消するため「電力揚水機」導入、我が国の「農業電化」の最初。農業電化の"生みの親"	明治三十年代の米作りでは水不足に悩まされていました。耕地整理や開田が進み農業用水の需要は増大する一方、田植え前後や渇水期は各地で水争いが絶えず、九兵衛は電力を利用した灌漑「電力揚水機」の設置を発案しました。明治三十五年に矢馳揚水機組合を組織し湯尻川に揚水機場を設置しました。	1854～1933
26	山形県	酒田市		梅津晴宗	約4200人の人夫と3年間の年月を要して文政3年に完成、灌漑面積は150余町に及び、収穫も倍となり、戸数、人口も増加している。	最上川川南の酒田市広野地区は昔ハノキ谷地と呼ばれ大小多くの沼が点在していました。幾多の先人が開発を進めましたが洪水被害が度重なり、梅津春宗は佐藤世八郎等12名の村民に諮り、溝、水門、沼を深くし貯水量を増やす計画を藩の許可を待たず遂行し約四千二百人の人夫と3年間の月日をかけ難工事を完成させました。	1767～1843
27	山形県	酒田市	遊佐町	今野茂作	上市神新田村より西に長さ約19町に及ぶ日向川新川掘割が完成したのは文久2年で、要した人夫が遊佐郷・荒瀬郷等から延べ20万人という大工事であった。	日向川の度重なる洪水によって寛永11年にはその3分の2近くを失い、さらに下藤塚新田村、東野新田村のように洪水から逃れるために全村移転しているほどであった。日向川流域の村々を洪水から救うために、西山に新川を掘割して日向川を直接日本海に注ぐ工事を完成させたのが今野茂作である。	1818～1882
28	福島県	須賀川市	オランダ プルメン	コルネリス・ファン	73年に日本の技術者のために《治水総論》を著し、さらに後年に《治水要目》および《堤防略解》を記して、日本の治水土木事業の基礎を作った。	オランダの土木技術者で、明治時代の政府や府県などによって雇用された外国人で 約8年間にわたって日本で河川・港湾の整備計画を立て、オランダ人土木技師のリーダーを務めた。携わった事業には、大きな成果を上げた安積疏水や、全面的な失敗に終わった野蒜築港などさまざまな事例がある。	1837年～1931年
29	福島県	須賀川市	福島県那須川市	小林久敬	安積疏水の必要性を強く明治政府に訴え、その実現に尽力し、現在の郡山市の基礎を築いた。	須賀川は日照りが続き、稲が実らず農民は苦しんでいた。久敬は猪苗代湖から水を引き人々を救おうと考え猪苗代湖と岩瀬地方が見渡せる斉木峠にトンネルを通すことを考えたが、明治政府と県は別ルートで安積疏水の工事を行い完成した。後に久敬の情熱と見識が認められ、民間功労者としてその労をねぎらわれた。	1821～1892
30	福島県	須賀川市	福島県郡山市	小野口仁蔵	安積疎水に功績があった人物です。(安積疎水とは、明治時代に猪苗代湖から農業用に開削した疎水で、郡山市周辺の農業に多大な恩恵をもたらしたことで知られています)"	安積疎水に功績を残した人物です。安積疎水は、古来より水利が悪く不毛の大地だった郡山の安積原野に、猪苗代湖から湖水を引いた一大事業です。この安積疎水の開削は、明治十二年から始まり、日本で初の国直轄の農業水利事業となりました。郡山市周辺の農業に多大な恩恵をもたらしたことで知られています。	不詳
31	茨城県	常陸	山梨県甲斐市	永田茂衛門	永田茂衛門とその子 勘衛門は、水戸藩の三大江堰とよばれる、辰ノ口、岩崎、小場の三江堰の開設工事に従事し、完成させた人物です。	永田茂衛門とその子勘衛門は水戸藩の三大江堰とよばれる 辰ノ口 岩崎 小場の開設工事に従事し完成させた人物です。久慈川や那珂川という大河川に大規模な堰を築き水路を設ける大規模開発に着手します。その指揮に当たった望月五郎左衛門が江堰開設のための技術者として目をつけたのが永田茂衛門父子でした。	生年不詳～1659年
32	茨城県	潮来市	茨城県香澄村	須田誠太郎	政府に訴え利根川に堤防を作った。利根川治水の父と呼ばれる	須田誠太郎は利根川豪雨水害によって母を失い、一生を治水対策にささげる決心をしました。その後新聞記者の肩書きを活かし利根川堤防、などを完成させるも洪水の被害は絶えず、私財を使い果たし水害対策に専念して利根川治水対策に努力しました。まさに利根川治水の父として一身をなげうっての事業でした。	1881年～1969年
33	茨城県	常陸市	千葉県	色川三郎兵衛	天保(てんぽう)13年11月2日生まれ。常陸(茨城県)土浦の醤油醸造業色川家の養子。維新後、県会議員をへて明治23年衆議院議員(当選2回)。土浦を水害からまもるため、鉄道の計画路線変更や河口水門の建設につくした。	維新後に政界へ進出し県会議員を経て、明治23年に立憲改進黨から立候補し当選し衆議院議員を2期務める。在任中には、鉄道会社に働きかけて日本鉄道海岸線(現常磐線)の敷設計画を変更させ、当時水害に悩まされていた土浦市の霞ヶ浦側に、線路の盛土を湖岸堤の代わりとして作らせるなど、水害対策に尽力した。	1842年～1905年
34	群馬県	桐生市	栃木県佐野市	田中正造	足尾鉾毒事件、渡良瀬川および利根川水系の水害に対して、その全生涯を反公害闘争と民衆救済のために捧げた政治家。精力的な治水行脚を行い、水害の原因が渡良瀬川水源地域の森林の大量伐採、関宿の突堤と栗橋鉄橋の設置にあると喝破し、「近自然河川工法」の先駆となる。	明治時代初期の足尾鉾毒事件、渡良瀬川および利根川水系の水害に対して、その全生涯を反公害闘争と民衆救済のために捧げた政治家。精力的な治水行脚を行い、水害の原因が渡良瀬川水源地域の森林の大量伐採、関宿の突堤と栗橋鉄橋の設置にあると喝破し、「近自然河川工法」の先駆となる。	1841年～1913年
35	栃木県	那須塩原市	栃木県日光市	印南文作	不毛の土地であった那須野が原の開拓に努力し、明治18年に那須疏水の開削を実現させ、豊かな農地に変えました。	那須野ヶ原は、那珂川、蛇尾川、箒川などによってつくられた複合扇状地で地下に厚く砂、小石が堆積し、雨や川の水はすぐに地下に浸透してしまい、水利に恵まれない原野でありました。那須野ヶ原の開拓のため、人々の生活のため、一日も早く水を引きたいと願っていた人々の中に「印南文作」と「矢板武」がおりました。	1831年～1888年

36		栃木県	那須塩原市	栃木県矢板市	矢板武	不毛の土地であった那須野が原の開拓に努力し、明治18年に那須疏水の開削を実現させ、豊かな農地に変えました。	明治から大正時代の開拓者、実業家 嘉永二年十一月十四日生まれ。 明治十三年、印南文作と那須開墾社を組織し、栃木県那須野ヶ原の開拓、那須疏水の開削につくしました。三十年栃木県会議員。下野銀行、矢板農場などを創立、また下野新聞社長を務めるなど多くの分野で栃木地域に多大な功績を残しました	1849年～1922年
37		埼玉県	さいたま市	和歌山県海南市	井澤弥惣兵衛	見沼を干拓し、見沼に代わる水源を利根川に求め、長さ六十軒余りの見沼代用水を半年余りで完成させ、二百町歩の新田を開発しました。	幕府は米を多く作るため八丁堤を切り開き、見沼ため井を田に変える計画を立てた 井澤弥惣兵衛はため井の代わりの用水を引くことにしたのが見沼代用水の始まりです。見沼代用水は利根川から取水し八丁堤まで六十キロメートルも流れる長い用水です。弥惣兵衛はこの長い見沼代用水を引く工事を村人の協力で完成させた。	1654年～1731年
38		埼玉県	川越市	埼玉県川越市	奥貫友山	寛保の大洪水にて、自己私財すべてを費やし、農民を救援し48ヶ村の10万6千名の命を救ったとされる。その後、自費で水塚と呼ばれる植林を続けたり、治水や防災に尽力した。	寛保2年、荒川・利根川が決壊して江戸時代最大の大洪水が発生。私財すべてを農民に抛出し率先して救助にあたり、自らの田畑を質入した金で食糧を買い続け1年に渡って窮民を救援し続け、最終的に10万人の命を救ったとされる。その後も、自費で水塚と呼ばれる植林を続け、幕府に防災策を言上し、治水や防災に尽力した。	1708年～1787年
39		埼玉県	志木市	埼玉県志木市	白井武左衛門	用水に乏しい宗岡に野火止用水を引くため、交差する新河岸川に「いろは樋」という掛樋を架設した。この架設によって宗岡村の農業発展に寄与した。また宗岡村の洪水を防ぐため、東西の新河岸川堤と荒川堤を結ぶ北側の佃堤、南側の新田場堤を築造し、宗岡村の惣囲堤を完成させ、治水整備に尽力。	用水に乏しい宗岡に野火止用水を引くため、交差する新河岸川に「いろは樋」という掛樋を架設した。この架設によって宗岡村の農業発展に寄与した。また宗岡村の洪水を防ぐため、東西の新河岸川堤と荒川堤を結ぶ北側の佃堤、南側の新田場堤を築造し、宗岡村の惣囲堤を完成させ、治水整備に尽力。	江戸中期
40		埼玉県	久喜市	埼玉県久喜市	田口清平	若い時に利根川の洪水による被災をみて、治水に関する技術や知識を習得する。権現堂川の行幸堤(幸手市)の築堤にあたって、水利掛として中心的な役割を果たし、明治天皇行幸の際に利根川治水の実情を奏上した。	若い時に利根川の洪水による被災をみて、治水に関する技術や知識を習得する。権現堂川の行幸堤(幸手市)の築堤にあたって、水利掛として中心的な役割を果たし、明治天皇行幸の際に利根川治水の実情を奏上した。なお、清平が中心となって築堤した行幸堤は、現在は桜の名所となっている。	1832年～1901年
41		千葉県	旭市	愛知県尾張	大原幽学	現千葉県旭市を中心に房総の各地をはじめ信州上田などで、農民の教化と農村改革運動を指導し大きな事績を残した人物です。	世の中が混乱していた幕末(天保・嘉永・安政)にかけて、長部村(現千葉県旭市)を中心に 農民の教化と農村改革運動を行い、大きな実績を残した人物です。尾張出身で、近畿圏にて実学を修行した後、その改革の中心地となったのが荒れ果てていた長部村(*今の千葉県旭市)でした。	1797年～1858年
42	関東	東京都	立川市	兵庫県	安松金右衛門	武蔵川越藩士。江戸の水不足を解消するために多摩川の引水工事として、玉川上水、野火止用水を完成させた。	承応4年、玉川上水の用水路が計画され、安松金右衛門に工事を命じられた。小川村から取水し新河岸川まで6里を掘り通しわずか40日という短工期で野火止用水を完成させた。これにより野火止200石の地は2千石を産するようになり、完成後、大雨が降った翌日以降、用水を流れる水を見た農民たちは大喜びしたと言う	1611年～1686年
43		東京都	渋谷区	東京都	古市公威	内務省土木局のトップとして全国の河川治水、港湾の修築のみならず、日本近代土木行政の骨格を作るとともに、工科大学長・土木学会長・工学会の会長として、日本近代工学ならびに土木工学の制度を作った。	内務省土木局のトップとして全国の河川治水、港湾の修築のみならず、日本近代土木行政の骨格を作るとともに、工科大学長・土木学会長・工学会の会長として、日本近代工学ならびに土木工学の制度を作りました。技術上・行政上に非凡の才能を振るい、近代土木界の最高権威とされました。	1854年～1934年
44		東京都	府中市	東京都府中市	川崎平右衛門	府中周辺が多摩川大洪水の後の治水工事や六所宮(大國魂神社)の東照宮の修理などに尽力するとともに、多摩地域の発展の礎となった武蔵野新田の安定化や新田村々の救済・復興の立役者。世界遺産で有名な島根県大田市の石見銀山の経営でも活躍。	武蔵国押立村(現在の押立町)で生まれ、地元府中周辺が多摩川大洪水の後の治水工事や六所宮(大國魂神社)の東照宮の修理などに尽力するとともに、多摩地域の発展の礎となった武蔵野新田の安定化や新田村々の救済・復興の立役者となる。世界遺産で有名な島根県大田市の石見銀山の経営でも活躍。	1694年～1767年
45		埼玉県	伊那町	愛知県西尾市	伊奈忠次	埼玉郡粕壁宿(春日部市)の名主。また水害を防ぐために自費を投じて五百間の堤を築いた。その後、再度洪水が襲ったが、戸毎に説いて土俵をつくらせ古堤の上に積ませた。昼夜の働きにより下流の田地およそ二万石以上の流失を免れることができた。これが喜蔵堤と名付けられた堤である。	埼玉郡粕壁宿(春日部市)の名主。水害を防ぐために自費を投じて五百間の堤を築いた。その後、再度洪水が襲ったが、戸毎に説いて土俵をつくらせ古堤の上に積ませた。昼夜の働きにより下流の田地およそ二万石以上の流失を免れることができた。これが喜蔵堤と名付けられた堤である。	1550年～1610年
46		埼玉県	春日部市	埼玉県春日部市	見川喜蔵	埼玉郡粕壁宿(春日部市)の名主。天明六年、関東は大洪水により飢饉となったが、自家用の米を出し、地主を説得して米麦を供出させ、窮乏した農民を救済。また水害を防ぐために自費を投じて五百間の堤を築いた。その後、再度洪水が襲ったが、戸毎に説いて土俵をつくらせ古堤の上に積ませた。昼夜の働きにより下流の田地およそ二万石以上の流失を免れることができた。これが喜蔵堤と名付けられた堤である。	天明六年、関東は大洪水により飢饉となったが、自家用の米を出し地主を説得して米麦を供出させ、窮乏した農民を救済。水害を防ぐため自費を投じて五百間の堤を築いた。その後再度洪水が襲ったが、戸毎に説いて盛り土を古堤の上に積ませ、二万石以上の流失を免れることができた。これが喜蔵堤と名付けられた堤である。	1739年～1805年
47		東京都	台東区	愛知県岡崎市	大久保藤五郎	家康に命じられ、奉行として江戸小石川上水(のちの神田上水)を完成させ主水の名をあたえられた。	天正18年江戸城下の上水工事の命を受ける。その後、約3か月で小石川目白台下の河流を神田方面に通し、これは後の神田上水の元となったとされている。また、この功績により家康から「主水」の名を与えられたが、水が濁ることを嫌って「もんど」ではなく「もんと」と発音するように命じられた。	不詳～1617年

48		埼玉県	川口市	埼玉県	伊奈忠治	伊奈忠次の次男。利根川,荒川の改修工事や江戸川などの開削	幕府に勘定方として出仕していた忠治は父、兄の仕事を引き継いで関八州の治水工事、新田開発、河川改修を行い、荒川開削、江戸川開削に携わりました。江戸初期における利根川東遷事業の多くが忠治の業績であり、鬼怒川と小貝川の分流工事や下総国、常陸国一帯の堤防工事などを担当しました。	1592年～1653年
49		埼玉県	坂戸市	埼玉県坂戸市	大川平三郎	日本の製紙王と呼ばれる大川財閥の創始者。水害が多発していた越辺川の堤堤防築造工事として私財を投じて「大川堤」を築いた。	日本の製紙王と呼ばれる大川財閥の創始者。小畔川や越辺川は度々氾濫を繰り返し、明治四十三年にも大洪水を引き起こしました。全額私費で地元の原次郎の協力を得て、約一キロメートルの堤防を建設しました。当時は大河でさえ国の河川管理は稀であり、今日それは「大川堤」と呼ばれています。	1860年～1936年
50		埼玉県	入間郡三芳野村	埼玉県県入間郡三芳野村	原次郎	治水への強い決意を胸に、入間川、越辺川、小畔川の国の直轄改修工事河川に指定や、三川分流工事の実現など治水に尽力した。	原次郎が生まれ育った集落は、入間川、越辺川の氾濫で水害に見舞われ、耕地が泥水につかり、農作物は半分、よくても七分ほど実ればいいという状態で貧しい村だった。「治水を図り、貧困をなくすこと」という強い決意を胸に、入間川、越辺川、小畔川の国の直轄改修工事河川に指定や、三川分流工事の実現など治水に尽力した。	1895年～1988年
51		神奈川県	海老名市	海老名村	望月珪治	1930年8月近郷7か町村を結合して相模川左岸普通水利組合を設立し、かんがい用排水改良事業を完成させた。	望月翁は、昭和5年近郷7か町村を結合して相模川左岸普通水利組合を設立、管理者となり、十数年にわたるかんがい用排水改良事業の完成に尽力しました。この事業により延長20キロメートル余りの水路、排水施設が完成し、2,200ヘクタールの耕地が水害と干ばつから救われました。	1883年～1969年
52	北陸信越	山梨県	南アルプス市	山梨県	徳嶋兵左衛門 (とくしま ひょうざ)	韮崎市から富士川舟運の起点、鰍沢までの水路の開削が計画され徳嶋兵左衛門の私財により工事が始められた。	釜無川の右岸地域は甲府盆地の北西部位置し釜無川の段丘扇状地と御勅使川扇状地にまたがり北部が水田地帯で南部は春から秋にかけてたくさんの果樹が実ります この地域に欠かすことが出来ないのが延長約17キロメートルに達する県内最大の農業用水路「徳島堰」です この徳島堰は「徳嶋兵左衛門」により開削されました	1620年？～没年不詳
53		山梨県	甲斐市	甲斐国	武田信玄	戦国時代の有力大名。当時氾濫が多発していた釜無川に20年以上にわたり堤防工事を行い、「信玄堤」という堤防を築いた。	甲府盆地は古来から釜無川、笛吹川などの氾濫原で、特に御勅使川は日本有数の扇状地を流れ、多量の土砂を釜無川に運び、その河床を上げ、水位を高くし、堤防の決壊を繰り返す甲州第一の水難場として恐れられていた。武田信玄は、大治水計画をなし、以来約二十年の歳月を費やし、この大土木工事を完成させた。	1521年～1573年
54		長野県	茅野市	長野県茅野市	坂本養川	茅野市・原村を中心とした諏訪藩に40年以上かかって、18本以上の用水路を作りました。「養川せぎ」と呼ばれています。	一七七五年高島藩に用水開発を請願しましたが採用されず、その後、何度かの上申の末、一七八五年(天明五年)、最初の出願以来十一年かかってその計画は陽の目をみました。繰越堰として最初の堰となる「滝之湯堰」の開削が行われたのです。以後一八〇〇年までの間に十五の堰が開かれました。	1736年～1809年
55		新潟県	長岡市	新潟県長岡市	本間屋数右衛門	信濃川の大規模治水事業である大河津分水工の提唱者。日本一の水量を誇る暴れる信濃川の流量調節のための堰として、以後200年にわたる工事を経て完成。	三島郡寺泊の豪商、大川津分水発願者。江戸幕府に対し分水建設を請願したが許可されず天保十三年には幕府も計画調査を実施したが莫大な費用及び周辺集落の反対により起工には至らなかった。明治維新後の一八六九年に白根の庄屋田沢与左衛門らが分水工事を越後府に請願、ようやく分水工事を行うことが決定した。	1716年～1801年
56		新潟県	上越市	新潟県	小栗美作	大湊郷の新田開発、中江・大湊両用水開削、直江津の築港、魚沼の銀鉱採掘など殖産興業に尽くした。	中江用水の開削は、寛文の大干ばつ後、関川から取水して別所川までの間をかんがいでいた「およべ川用水」を掘りつぐ構想を樹立しましたが、大普請のため続けることができませんでした。そこで、美作が中心となり、藩営事業として1674年(延宝2年)工事に着手し、1678年に完成しました。	1626年～1687年
57		新潟県	高田市	京都府京都市	国友末蔵	1934年に建設した池尻川式揚水発電所は夏・冬の渇水を緩和させ、発電事業と農業水利の共存を図ったものだった。	明治四十年、関川水系の落差を有効に使った名香山麓蔵々の五〇〇キロワットの水路式発電所を建設。国友の発電事業の中で特筆されるものは野尻湖の水を冬期間発電に用い雪融水を野尻湖に吸い上げる池尻川揚水発電所を建設したことでした。これにより発電と灌漑用水とも有効利用できるようになりました。	1881年～1960年
58		新潟県	妙高市	新潟県美守村	太田孫次右衛門	孫次右衛門は妙高市赤倉付近に土地を所有していたことから、地元の人々と連携して温泉の開発を行いました	明治四年高田の医師瀬尾玄弘は四の辻の自宅で「知命堂」を開業しました。孫次右衛門は地域医療向上のため総合病院設立をめざす瀬尾に支援を行い明治二十四年「知命堂病院」の創設に尽力しました。 また、孫次右衛門は妙高市赤倉付近に土地を所有していたことから、地元の人々と連携し温泉の開発を行いました。	1852年～1911年
59		新潟県	高田市	新潟県上越市	丸山豊次郎	長年続いた水争いを防ぐために地域の簡易水道敷設に取り組んだ	新潟県上越市に生まれた丸山豊治郎は地元の住民間で長年続いた水争いの禍根を断とうと思い、川の水利権の確率を図るため尽力しました。また、1933年(昭和8年)4月には良質な飲用水を利用できるように地域の簡易水道の敷設に着工し、同年6月には竣工式を行いました。晩年を地元開発に取り組みました。	1868年～1933年
60		新潟県	直江津市	新潟県直江津市	古川長四郎	佐渡汽船の設立と直江津港の設備改善に尽くす	古川長四郎は、直江津の本砂山町(現在の中央四丁目)の廻船問屋に生まれ、佐渡商船株式会社第四代目社長に就任。その後県会議員をつとめ、一九三二年(昭和七年)に佐渡汽船株式会社を設立した。一九四二年には直江津町長に就任し、直江津港修築工事期成同盟会を結成、直江津港の発展に尽力した。	1895年～1949年

61		新潟県	三条市	新潟県三条市	松尾与十郎	当時の楠本県令が堤防をつくることを反対していた五十嵐川の北側の人たちを説得して、南側の堤防をつくる許可を出した。与十郎は県から補助金がでなかったので、私財を使って堤防をつくりはじめ明治9年に完成した。	片口村の旧庄屋に生まれた与十郎は、水害の惨状を目の当たりにし、人々を守るには五十嵐川の堤防以外無いと決意、当時堤防をつくることに反対していた五十嵐川の北側の人たちを説得し、南側の堤防をつくる許可を出しました。与十郎は県から補助金が出なかったため、私財を使い堤防をつくりはじめ明治9年に完成しました。	1832年～1886年
62		富山県	滑川市	富山県	椎名道三	新田開発は、越中から能登・加賀までにも及び、生涯に開拓した面積は1,200町歩(1,200ヘクタール)にもなる。	道三は、厳しい山村で育ったため「農地さえあれば」と、土木・測量の技術習得に励み、14歳のとき、少しの面積であったものの、村の谷川を流れる水を集めて開田し、世間で評判になったといわれています。 道三が生涯に開田した面積は一二〇〇ヘクタールに達し多くの農民を貧困から救いました。	1790年～1857年
63		富山県	富山市	オランダ コレインスブラート	ヨハネス・デ・レー	砂防や治山の工事を体系づけたことから「砂防の父」と称される。	明治二十四年七月、大雨災害の折、常願寺川流域も安政の大水害に次ぐ災害となりました。県知事は国に専門技師の派遣を要請デ・レーケが同年八月六日富山に到着し九月二日石川県へ出発するまでに常願寺川を始め黒部川、片貝川、上市川、庄川、神通川の各水系と伏木港を視察し治水計画を立てました。	1842年～1913年
64	北陸信越	富山県	黒部市	富山県朝日町	伊東彦四郎	加賀藩に黒部川からの用水開削を請願し1796年、11代藩主・前田治脩から財政援助を得た。しかし、水路をつくる右岸は断崖絶壁であり測量機械のない時代、彦四郎は工夫をこらして提灯の灯りを利用し夜、岩壁に登った人夫に、対岸から提灯の上げ下げを指図して、岸壁に印をつけさせて測量を進めた。	加賀藩に黒部川からの用水開削を請願し一七九六年、十一代藩主・前田治脩から財政援助を得ました。しかし、水路をつくる右岸は断崖絶壁で測量機械の無い時代、彦四郎は工夫し提灯の灯りを利用し夜、岩壁に登った人夫に、対岸から提灯の上げ下げを指図して、岸壁に印をつけさせて測量を進めました。	1758年～1834年
65		富山県	砺波市	富山県氷見市	浅野総一郎	日本で初めてとなる耐震設計理論を取り入れた小牧ダムを作った	日本セメント産業の創設者で、後の浅野財閥の総帥。一八九八年に浅野セメント合資会社を設立し、多くの関連事業を設立した。鶴見ー川崎間の遠浅の海岸を埋立て、大工業地帯を造成し製鉄所、造船所も設立した。日本で初めてとなる耐震設計理論を取り入れた小牧ダムを作ったことで周辺地域の開発が進んだ。	1848年～1930年
66		富山県	富山市	熊本県玉名市	高田雪太郎	その頃の富山県では水害が頻発しており当時の富山県知事は、常願寺川改修の必要性を痛感し政府に要請。政府は、デ・レイケを派遣する。デ・レイケは、県内各河川の調査を行い、そのほとんどに雪太郎は随行し記録を残している。そして基本計画を作成しデ・レイケの指導の下、雪太郎が施工することとなりました。	明治二十四年の大洪水により大きな被害を被った際、富山県知事は、常願寺川改修の必要性を痛感し政府に要請。政府はデ・レイケを派遣した。 デ・レイケは県内各河川の調査を行い、そのほとんどに雪太郎は随行し記録を残した。そして基本計画を作成しデ・レイケの指導の下、雪太郎が施工することとなった。	1859年～1903年
67		富山県	富山市	愛知県名古屋市	佐々成政	戦国時代、佐々成政は治水に取り組み、常願寺川がたびたび氾濫し、水害が起こっていたため、「佐々堤」の築造や、いたち川の改修を行ないました。 常西用水路の川底には成政が造った石堤の跡が現在も残っています。	戦国時代、常願寺川はたびたび氾濫し、水害が起こっていた。佐々成政は治水に取り組み「佐々堤」の築造や、いたち川の改修を行なった。常西用水路の川底には成政が造った石堤の跡が現在も残っている。また、佐々成政は治水工事につきものだった人柱を禁じて、代わりに自身の名前を書いた石を埋めるようにした。	1536年～1588年
68		富山県	砺波市	富山県砺波市	佐藤助九郎	庄川べりの開発村は幾度となく川の氾濫による水害に苦しめられていました。助九郎16歳のときに佐藤組を起こし常願寺川の川工事を請け負うがその後何度も洪水をくりかえした。明治24年の常願寺川大洪水の工事の際に、内務省付属のオランダ人技師デ・レーケを招聘して指導を受け、見事、工事を成功させた。	富山県西部を流れる庄川は幾度となく川の氾濫による水害に苦しめられていた。助九郎十六歳のときに佐藤組を起こし常願寺川の川工事を請け負うがその後何度も洪水をくりかえした。明治二十四年の常願寺川大洪水の工事の際に、内務省付属のオランダ人技師デ・レーケを招聘して指導を受け、見事に工事を成功させた。	1847年～1904年
69		石川県	加賀市	石川県金沢市	高多久兵衛	高多久兵衛の行った田区改正は、西欧の土地改正をモデルにしており、その後、「石川式」として全国に広まった。	石川県令はルクセンブルグの耕地整理を模範とし田区改正を行うよう久兵衛に依頼しました。久兵衛は上安原村の地主に説明したが費用がかさむことから反対された。以前から用水路改修を行うなど農業改良に熱心だった久兵衛はあきらめず工事費用の一時立て替えや所得補償を約束することでようやく承諾を得て着工した。	1851年～1907年
70		福井県	坂井市	福井県坂井市	渡辺泉龍	荒地の開拓を志し、藩主本多成重公の許可を得て、寛永二年約五年の歳月をかけ、東二ツ屋から山久保に至る延長二里十四町の新江用水を開いた。	丸岡町の野中山王、山崎三ヶの田へ水を運ぶ「新江用水路」は今から約三〇〇年前に渡辺泉龍と丸岡藩によって作られた用水路です。新江用水路ができる前の野中山王、山崎三ヶ付近は荒地で、田も少なく農家の方もあまり住んでおらずこの荒地を田にするために泉龍が立ち上がりました。	生年不詳～1672年
71		福井県	坂井市		継体天皇	次に地形を調査のうえ、大規模な治水を行い九頭竜川・足羽川・日野川の三大河川を造ることで湿原の干拓に成功した。このため越前平野は実り豊かな土地となり人々が定住できるようになった。続いて港を開き水運を発展させ稲作、養蚕、採石、製紙など様々な産業を発達させた。	継体天皇は、大規模な治水を行い九頭竜川・足羽川・日野川の三大河川を造ることで湿原の干拓に成功した。これにより越前平野は実り豊かな土地となり、人々が定住できるようになった。河川の整備に続いて港を開き水運を発展させることで稲作、養蚕、採石、製紙など様々な産業を発達させた。	507年～531年？
72		岐阜県	関市	愛知県尾張	喜田吉右衛門	長良川から取水し、岐阜県関市～美濃市の農地約1,000haを潤す幹線延長約17kmの曾代用水を開く。	寛文三年、現在の関市一帯は水不足に悩まされていました。この地に移住してきた尾張藩の浪人喜田吉右衛門と弟の林幽閑はこれを見かねて、柴山伊兵衛と相談し長良川から水を引く用水を計画しました。着工から十年を経て完成した約十七キロメートルの曾代用水により荒れ地は美しい田んぼに生まれ変わりました。	生年不詳～1671年
73		岐阜県	関市	愛知県尾張	林幽閑	長良川から取水し、岐阜県関市～美濃市の農地約1,000haを潤す幹線延長約17kmの曾代用水を開く。	寛文三年、現在の関市一帯は水不足に悩まされていました。この地に移住してきた尾張藩の浪人喜田吉右衛門と弟の林幽閑はこれを見かねて、柴山伊兵衛と相談し長良川から水を引く用水を計画しました。着工から十年を経て完成した約十七キロメートルの曾代用水により荒れ地は美しい田んぼに生まれ変わりました。	不詳
74		岐阜県	関市	岐阜県武儀郡	柴山伊兵衛	長良川から取水し、岐阜県関市～美濃市の農地約1,000haを潤す幹線延長約17kmの曾代用水を開く。	寛文三年、現在の関市一帯は水利の便が悪く、水不足に悩まされていました。この地に移住してきた尾張藩の浪人喜田吉右衛門と弟の林幽閑はこれを見かねて、柴山伊兵衛と相談し長良川から水を引く用水を計画しました。着工から十年を経て完成した約十七キロメートルの用水により荒れ地は美しい田んぼに生まれ変わりました。	1611年～1703年

75	岐阜県	岐阜県養老郡	鹿児島県	平田鞠負	洪水をたびたび起こす木曾三川から濃尾平野を守るために堤防工事を幕府の命令により薩摩藩がすることになる。平田鞠負は難工事であった宝暦治水の指揮をとる。流行病の影響もあり、工事は難航し33名が病死する。工事により薩摩藩の財政は悪化し平田鞠負は工事完了後に責任をとって自害する。	洪水をたびたび起こす木曾三川から濃尾平野を守るために堤防工事を幕府の命令により薩摩藩がすることになる。平田鞠負は難工事であった宝暦治水の指揮をとる。流行病の影響もあり、工事は難航し33名が病死する。工事により薩摩藩の財政は悪化し平田鞠負は工事完了後に責任をとって自害する。	1704年～1755年
76	岐阜県	愛西市	岐阜県岐阜市	山田省三郎	洪水の多い輪中という地域に生まれ水害で苦しんだ経験を持つ。県会議員当選後に同じく水で苦しむ他の議員と協力し西濃治水派を形成する。堤防の建設は県全体の利益につながるとして堤防の建設費を直接被害を受けた人の負担ではなく、県の負担にするように訴えた。治水の重要性を訴え続け「治水共同社」を結成するなど木曾三川の改修に尽力する。	洪水の多い輪中という地域に生まれ水害で苦しんだ経験を持つ。県会議員当選後に同じく水で苦しむ他の議員と協力し西濃治水派を形成する。堤防の建設費を直接被害を受けた人の負担ではなく、県の負担にするように訴えた。治水の重要性を訴え続け「治水共同社」を結成するなど木曾三川の改修に尽力する。	1843年～1916年
77	岐阜県	岐阜市		酒井七右衛門	新しく堤防を造る場合は幕府の許可が必要になるが幕府の許可は簡単には下りなかった。水害で苦しむ人のために、幕府の許可を得るために尽力する。1813年に幕府は酒井七右衛門の説明により築堤を許可した。畑繫堤には1600メートルにもなった。畑繫堤防に貢献した人物として畑繫神社に祀られている。	新しく堤防を造る場合は幕府の許可が必要になるが幕府の許可は簡単には下りなかった。水害で苦しむ人のために、幕府の許可を得るために尽力する。1813年に幕府は酒井七右衛門の説明により築堤を許可した。畑繫堤には1600メートルにもなった。堤防に貢献した人物として畑繫神社に祀られている。	？年～1819年
78	岐阜県	木曾三川水系	岐阜県大垣市（銅像あり）	金森吉次郎	明治29年に大洪水が西濃地方を襲い、一命を捨てる覚悟で村人を集め堤防を切り割り、輪中にたまっていた水を揖斐川へ放出。結果、8000戸の家屋と4万人の人命を救うことになる。大正12年には、洪水の恐ろしさを広く世間に知らせようと、明治29年の浸水位を礎石に刻み洪水標としました。	明治29年に大洪水が西濃地方を襲い、一命を捨てる覚悟で村人を集め堤防を切り割り、輪中にたまっていた水を揖斐川へ放出。結果、8000戸の家屋と4万人の人命を救うことになる。大正12年には、洪水の恐ろしさを広く世間に知らせようと、明治29年の浸水位を礎石に刻み洪水標とした。	1864年～1930年
79	静岡県	浜松市	静岡県浜松市	金原明善	天竜川の治水事業、北海道開拓・植林事業など近代日本の発展に活躍した人物。	明治10年全財産献納の覚悟を決めた明善は内務卿大久保利通に築堤工事実現の為に謁見した。明善自身も一介の田舎農民が内務卿への謁見は叶わないと思っていた。ところが快く大久保利通との謁見は実現した。それは長年、誠実一途に天竜川の治水工事に奔走している明善の話が大久保利通の耳に入っていたからである。	1832年～1923年
80	静岡県	掛川市	静岡県掛川市	名倉五郎助	水不足により育てた稲が枯れるなどの苦しい生活から人々を救うために川底を通る地下水路を造り、100ヘクタールに及ぶ広大な田畑に水を引き人々の生活を支える	西大淵村から、今沢新田にかけての田畑は水の便が悪く、時に水争いもありました。水不足により育てた稲が枯れるなど苦しい生活から人々を救うために坊主淵川の水を田畑に引き入れるための川底を通る地下水路を造り、百ヘクタールに及ぶ広大な田畑に水を引き人々の生活を支えるための工事を始めた。	不詳
81	静岡県	菊川市	静岡県菊川市	中条右近太夫	水不足にあえぐ人のために幕府に直接訴え嶺田用水の建設にこぎつけるも、越訴を禁じる幕府に処刑される。死後に井の宮神社に祀られ、井宮様と呼ばれ地域の方から信仰を集める	右近太夫は、干ばつ被害に困窮していた嶺田地区に隣村の奈良淵から水を引こうと計画、用水の建設を幕府に直接訴えました。幕府は建設を認めたものの領主を飛び越えて幕府に直接訴え出ること厳しく禁じられており右近太夫は処刑されました。死後に井の宮神社に祀られ、井宮様と呼ばれ地域の方から信仰を集めました。	不詳
82	静岡県	菊川市	静岡県菊川市	松下幸一	菊川は一級河川として認められます。そして昭和8年(1933年)、悲願の堤防改修工事が始まりました。 当時、戦争により日本の多くの川は工事を中止させられました。しかし、菊川だけは工事を続けることができました。その理由は、食料を作るために菊川の水が必要だったことありますが、それ以上に期成同盟会の人たちの熱心な思いが通じたためでしょう。 先人のあとを継いで、一級河川への編入を果たした幸一は、全国的にも例のない改修促進を実現しました。	幸一は、水害を調べたり、改修費用の援助を求めるため国や県へお願いしたりしました。しかし、何度お願いしても良い返事をもらえませんでした。それでも幸一はあきらめずに国へお願いし続けました。 この誰にも負けないねばり強さと努力のおかげで、昭和8年(1933年)、悲願の堤防改修工事が始まりました。	1894年～不詳
83	静岡県	菊川市	静岡県菊川市	黒田定七郎	明治43年(1911年)の8月、大雨により牛淵川の堤防が欠潰します。激しく降る雨の中で、定七郎は大勢の人を指揮し、堤防を復旧。	菊川や牛淵川などの支流は、農業に欠かせない水を与えてくれる一方で、度々水害を起こし、その都度大きな被害を受けていました。 定七郎は、治水問題に精魂を傾け、養父源五郎の意思を継ぎ、河川改修運動に同士を集結。先頭に立ち、菊川の堤防を改修することに全力を注ぎました。	1861年～不詳
84	静岡県	牧之原市	静岡県牧之原市	本間賢三	たびたび氾濫する坂口谷川の川幅の拡幅を行い、大井川から水を引き、干ばつに備える為の水路を作る。 村人を説得し、皆から集めたお金を元に拡幅工事は行われ、明治4年(1871年)に完成する。 大井川から水を引く工事は、長さ300メートルの隧道工事が必要だった。当時は手掘りのため、困難と多くの費用が掛かり、資金がなくなり私財を売り工事を続け、明治9年(1876年)に用水路は完成しました。	たびたび氾濫する坂口谷川の拡幅を行い、大井川から水を引き、干ばつに備えて水路を作るため、村人を説得し集めた資金で拡幅工事は明治4年に完成。大井川から水を引く工事は、長さ300メートルの隧道工事が必要であり当時は困難と多くの費用が掛かったが私財を投じて工事を続け、明治9年に完成した。	不詳
85	静岡県	磐田市		犬塚祐一郎	草崎村(現磐田市)周辺は土地が低く洪水地帯でしたが、この地の水を仿僧川へ流す排水路(蝦島水道)を造り、悪夢であった毎年の水害から救っています。	天保の大飢饉の2年前、中泉代官所(現磐田市)に幕府の役人として赴任。この地は土地が低く洪水地帯であったが、この地の水を流す排水路(蝦島水道)を造り、悪夢だった毎年の水害から人々を救った。また、天竜川に大堤防を造り、河川敷の新田開発や両岸の防水組合設立など大きな業績を残した。	不詳
86	愛知県	安城市	安城市	都築弥厚	「安城が原」と呼ばれる枯れた土地であった地域に用水を通すための測量を行い、幕府に出願しましたが、用水が完成する前に病没します。その後、明治13年に明治用水は通水開始し、碧海地域の土地は飛躍的に開発され、大正末から昭和初めにかけて、「日本デンマーク」と言われるまでの農業地帯となりました。	明治用水は矢作川を水源とし愛知県安城市を中心に八市にまたがる約六千ヘクタールの農地を灌漑する農業用水です。この地域は小規模な水田が開かれていましたが農民は常に水不足に悩まされていました。矢作川の水を碧海台地に導いて大規模な新田開発を計画したのが和泉村の都築弥厚翁でした。	1765年～1833年
87	愛知県	知多半島	愛知県知多半島	久野庄太郎	地域は、1947年に大干ばつを受けて溜池が壊滅し大きな被害を受けた。これにより用水設置を求める運動が起こった。このうち、木曾川からの引水を計画したのが篤農家の久野庄太郎と安城農林高校教諭の浜島辰雄である。	愛知用水は、水に苦しむ知多半島のため昭和三十二年から始まったプロジェクトです。御嶽山に牧尾ダムを造り、木曾川から水路を引いて知多半島を潤す。その後の高度経済成長の先駆けともなった大事業でした。知多半島の農民としてその夢の用水の実現に命をかけてきたのが久野庄太郎翁と同士・浜島辰雄氏でした。	1900年～1997年

88	愛知県	犬山市	愛知県西尾市	伊奈忠次	犬山から弥富にまで続く御囲堤を造る。伊奈備前堤とも呼ばれ、洪水の防止に貢献する。「伊奈流」と呼ばれる洪水対策の堤防システムは幕府の基本方となる。	徳川家康の命令を受け洪水の被害を減らすために-犬山から弥富にまで続く御囲堤50キロメートルを造る。伊奈備前堤とも呼ばれる。「伊奈流」と呼ばれる洪水対策の堤防システムは幕府の基本方となる。他に木津用水の開削にも関わる。これにより広い範囲に水を送ることが可能となる。	1550年～1610年
89	愛知県	豊田市		西澤真蔵	枝下用水の建設に私財を投じ、借金を抱えながらも用水路の完成へと尽力し豊田市南西部の田畑に潤いを与える。死後に枝下用水の守護神として川神社に祀られる	西澤真蔵は、弘化元年に愛知郡野々目村に生まれ、商人として各種の事業を手がけ大きな成功をおさめました。その後、水不足に悩む愛知県の高岡地区や猿投地区（現在の豊田市）で進められていた枝下用水の開鑿工事に関わり、全財産を投げ打ち、膨大な借金を背負い、人生をかけて枝下用水を完成させました	1844年～1897年
90	愛知県	知多半島	滋賀県愛知郡 愛知県豊明市	浜島辰雄	地域は、1947年に大干ばつを受けて溜池が壊滅し大きな被害を受けた。これにより用水設置を求める運動が起こった。このうち、木曽川からの引水を計画したのが篤農家の久野庄太郎と安城農林高校教諭の浜島辰雄である。	愛知用水は、水に苦しむ知多半島のため昭和三十三年から始まったプロジェクトです。御嶽山に牧尾ダムを造り、木曽川から水路を引いて知多半島を潤す、その後の高度経済成長の先駆けともなった大事業でした。知多半島の農民としてその夢の用水の実現に命をかけてきたのが久野庄太郎翁と同士・浜島辰雄氏でした。	1916年～2013年
91	三重県	淀川水系	三重県度会郡南伊勢町（銅像あり）	河村瑞賢	江戸時代の商人。海運と治水の功労者。江戸に出て材木商となり、明暦の大火で巨利を得た。のち、東廻り航路、西廻り航路を開発。淀川水系の工事にあたり、近畿地方の治水工事に大貢献をなした。	元和4年2月生まれ。江戸時代前期の商人で海運と治水の功労者。漬物屋から土木建築業に転じ、明暦の江戸大火では材木の買い占めで利益をあげました。鉾山や新田の開発、東廻航路・西廻航路の整備、淀川治水のための安治川開削などの事業を手がけ大貢献し旗本にとりたてられました。	1618年～1699年
92	三重県	津市	静岡県	西嶋八兵衛	雲出井用水路は、現在の津市、久居市の優良農地約800ヘクタールをかんがいする農業用水利施設。伊勢の国二代目藩主藤堂高次は、八兵衛に命じて領内を巡回させた。八兵衛は、藩主の許しを得て、雲出井用水開削の大工事に着手した。	西嶋八兵衛は、遠州浜松で生まれ、水利、土木、経済、書道に優れ17歳の時に伊勢津藩主藤堂高虎に仕えました。八兵衛は二代目藩主藤堂高次から命ぜられ領内を巡回、雲出井用水開削の大工事に着手しました。雲出井用水路は、現在の津市、久居市の優良農地約八〇〇ヘクタールを灌漑する農業用水利施設。	1596年～1680年
93	滋賀県	長浜市	滋賀県高月町	恵荘上人	余呉川の氾濫から村を守るために遂道を掘り琵琶湖へ排水する西野水道を完成	高月町西野は北と西を山に囲まれた低地でよく洪水が起きていました。恵荘はこの洪水を何とかしようと西の山をくり抜いてびわ湖へ排水を流す事を考えていました。そこで恵荘と住民は彦根藩から「隧道」を掘る許可をもらい、天保十一年より工事をはじめました。五年後の弘化二年に西野隧道が完成しました。	1778年～1849年
94	滋賀県	高島市	滋賀県	藤本太郎兵衛	大雨が降った際に周辺河川からの水が琵琶湖に集まり水害をおこす。水害をなくすべく、琵琶湖の水位を下げるために瀬田川の川底を深くする工事を行うことになる。治水工事は瀬田川の全長14キロメートルで行われた。藤本太郎兵衛は親子3代に渡り私財を投じ尽力した。	大雨が降った際に周辺河川からの水が琵琶湖に集まり水害をおこす。水害をなくすべく、琵琶湖の水位を下げるために瀬田川の川底を深くする工事を行うことになる。治水工事は瀬田川の全長十四キロメートルで行われた。藤本太郎兵衛は親子3代に渡り私財を投じ尽力した。天保の御救大凌と呼ばれる。	不詳
95	滋賀県	高島市	滋賀県高島市	松本彦平	土地が高台にあり、周囲の河川から田畑に水を引くこともできない状態であった、そのため貯水池をと作る必要にせまられた。松本彦平の指示の下、淡海湖の工事は進められるが完成を見ずに亡くなる。9年に及ぶ工事で淡海湖は完成し、水の確保ができるようになったため新田開発にもつながる	土地が高台にあり、周囲の河川から田畑に水を引くこともできない状態であった、そのため貯水池を作る必要にせまられた。松本彦平の指示の下、淡海湖の工事は進められるが完成を見ずに亡くなる。九年に及ぶ工事で淡海湖は完成し、水の確保ができるようになったため新田開発にもつながる	1856年～1919年
96	滋賀県	長浜市		籠手田安定	第二代滋賀県令であった籠手田安定は、田川の水害に苦しむ月ヶ瀬、田、酢、唐国の4つの村を多くの労力と予算を投じ救う。水害から村々を救った恩人として、水引神社に祀られている	県令籠手田安定は、明治15年に田川改修工事の施行を県会に提案したが、工事費が莫大であり受益範囲が限定的で下流に強い反対があることを理由に議会で否決された。翌明治十六年にも再提案したがまた同一理由で否決された。そこで県令は明治政府の許可を受ければ工事が出来るという規則を発動して工事を実施した。	1840年～1899年
97	京都府	綾部市	京都府綾部市	近藤勝由	天田井堰と綾部井堰を統合しようと考え、約900メートルの水路を掘り、2つの井堰の水路をつなぐ計画を立てた。困難で無謀な工事だと農民からの反対にあったが、勝由は私財を投げうって工事に取りかった。これにより、綾部用水の基礎が築かれたのです。	洪水により天田井堰が大きな被害を受けました。そこで勝由は天田井堰と綾部井堰を統合しようと考え、約九〇〇メートルの水路を掘り、二つの井堰の水路をつなぐ計画を立てました。困難な工事だと農民から反対されましたが、勝由は私財を投げうって工事に取りかかりました。これにより、綾部用水の基礎が築かれました。	1827年～1901年
98	京都府	相楽郡加茂町		慈心上人（覚真）	瓶原大井手用水開削の祖 大井手水路は、鎌倉時代中期の貞応元年、現在の京都府相楽郡加茂町瓶原の海住山寺の慈心上人が、和東郷石寺の和東川に水源を求め、川に井手枕という堰堤を設け、そこから、幅1.81m、勾配1250分の1、水深0.3m、延長6755mの水路を村人とともに完成させた。	瓶原大井手用水開削の祖 大井手水路は、鎌倉時代中期の貞応元年、現在の京都府相楽郡加茂町瓶原の海住山寺の慈心上人が、和東郷石寺の和東川に水源を求め、川に井手枕という堰堤を設け、そこから、幅1.81m、勾配1250分の1、水深0.3m、延長6755mの水路を村人とともに完成させた。	1170年～1243年
99	京都府	京都市	京都府京都市	角倉了以	私財を投じ大堰川、高瀬川を開削工事を行ない舟による輸送を可能とし、町の発展に貢献する。他に幕府から命じられた天竜川、富士川の開削工事を行なう。	朱印船貿易の開始とともに安南国との貿易を行い、山城（京都）の大堰川、高瀬川を私財を投じて開削した。また江戸幕府の命令により富士川、天竜川、庄内川などの開削を行った。地元京都では商人としてよりも琵琶湖疏水の設計者である田辺朝郎と共に「水運の父」として有名である。	1554年～1614年
100	大阪府		堺市	行基	奈良時代の日本の僧。寺と僧侶を広く仏法の教えを説き人々より篤く崇敬された。そして行基集団を形成し、道場や寺院を49院、溜池15窪、溝と堀9筋、架橋6所を造った。	行基集団を形成し、道場や寺院を四十九院、溜池十五窪、溝と堀九筋、架橋六所、国家機関と朝廷が定めそれ以外の直接の民衆への仏教の布教活動を禁じた時代に、禁を破り畿内（近畿）を中心に民衆や豪族など階層を問わず困窮者のための布施屋九所等の設立など数々の社会事業を各地で成し遂げた。	668年～750年
101	大阪府	大阪市	兵庫県豊岡市	沖野忠雄	1916年から2年間土木学会の会長を務める。治水港湾の始祖。豪雨のたびに水害が起きていた淀川の改修工事を行なった。この工事により水量が調節され水害が減少する。	かかわった改修工事は、港が八十、河川が百にも及び「治水の神様」と称された。内務省直轄事業の基礎を築き、「内務省直轄事業の父」「明治河川改修の父」などと称された。なかでも、近代日本の治水の歴史に燦然と輝くのが淀川改良工事であるといわれ、「新淀川の父」とも称される。	1851年～1921年

102	近畿	大阪府	大阪市	オランダ　レーワルデン	ジョージ・アーノルド	淀川、寝屋川、鯉江川の三つの河川の交流地点に堤を設置し、大雨時に淀川の水が逆流するのを防いだ。他に坂井港のエッセル堤などの設計を行なった。	明治六年、三十歳のときに、日本政府に雇われて来日し日本の近代化のためインフラ整備を指導しました。淀川水系の調査・設計を手始めに、鳥取県千代川、東京都江戸川、千葉県利根川、新潟県信濃川、山形県最上川、赤川などで改修工事の指導、設計に当たりました。このほか坂井港のエッセル堤などの設計も行いました。	1843年～1939年
103		大阪府	大阪市		仁徳天皇	淀川の水害を防ぐため、日本最古の堤防といわれている茨田堤を築いた。茨田堤は日本書紀や古事記にも記載されており、渡来人の高度な土木技術をもって築かれた。長さは20キロメートルを超える。	河内平野における水害を防ぎまた開発を行うため難波の堀江の開削と茨田堤（大阪府寝屋川市）の築造を行った。これが日本最初の大規模土木事業だったとされる。又、山背の栗隈県（京都府城陽市西北～久世郡久御山町）に灌漑用水を引かせた。そして、灌漑用水として感玖大溝を掘削し広大な田地を開拓した。	290年～399年
104		大阪府	枚方市	愛知県名古屋	豊臣秀吉	枚方市から長柄市まで続く約27キロメートルに及ぶ堤防、文禄堤を造った。この堤防により、淀川の氾濫防被害の防止や伏見城と大阪城を今までよりも短い距離でつなぐことができた。	豊臣秀吉は織田信長の家臣として台頭し土木技術を巧みに活かした戦法、築城を得意とし様々な土木施設を手がけた人物です。大阪城築城では周辺地域の新田開発と洪水防御のため淀川に太閤堤や文禄堤等を築き淀川の流路を固定、これ以外にも多くの治水事業等に携わり土木技術を飛躍的に発展・普及させました。	1537年～1598年
105		大阪府	東大阪市	大阪府東大阪市	中甚平衛	「大阪の川の流れを変えた男」と呼ばれる。50年にもわたり大和川の付け替え工事を嘆願し続ける。付け替え工事では指揮を任せられ、工事は長さ14キロメートルの新しい川を作ることになる。この工事により水害を減らすことができた。	「大阪の川の流れを変えた男」と呼ばれる。50年にもわたり大和川の付け替え工事を嘆願し続ける。付け替え工事では指揮を任せられ、工事は長さ14キロメートルの新しい川を造ることになる。この工事により川の水を海まで直接通すことが可能となり、水かさ少なくなり、水害を減らすことができた。	1639年～1730年
106		兵庫県	稲美町		魚住完治	「山田川疏水」の詳細な調査を行いました。が、地盤が悪く、工事費が高くなるため、淡河川から取水することとし、1888年に工事にかかり、完治は指導監督に当たり、疏水の完成に大きく貢献した。これにより、710ヘクタールが水田化されました。	いなみ野台地は雨が少なく、度重なる干ばつが襲い農家は困窮していた。私財を投じて山田川からの疏水を造るため測量を行ったが、地盤が悪く工事費が高むため淡河川から取水することとし明治21年に着工し3年後に完成、710ヘクタールが水田化された。工事では指導監督にあたり疏水完成に大きく貢献した。	1828年～1899年
107		兵庫県	神奈川県横浜市	インド　バンガロール	ヘンリー・S・パー	1883年に来日神奈川県より横浜上水道建設計画の依頼を受け3ヵ月で実地測量から計画まで完成させて多摩川取水計画と相模川取水計画の2案を県に提出して帰国する　1885年に再来日　水道工事の全てを任せられると水源を相模川支流の道志川とし野毛山配水池に至る総延長48kmの横浜水道建設を着工指揮にあたる　日本初の近代水道を完成させた	一八八三年来日し神奈川県より横浜上水道建設計画の依頼を受け多摩川取水計画と相模川取水計画の2案を県に提出して帰国。一八八五年に再来日し水道工事の全てを任せられると水源を相模川支流の道志川とし野毛山配水池に至る総延長四十八キロメートルの横浜水道建設を着工指揮にあたり日本初の近代水道を完成させました。	1838年～1893年
108		兵庫県	高砂市		市丸又四郎	加古川の支流である荒井川にはさまれ、頻繁に洪水が起きていた。そのため市丸又四郎は堤防を造る。この堤防により荒井川の水害に苦しめられていた人々が救われることになる。	加古川支流の荒井川にはさまれ、頻繁に洪水が起きていた。そのため市丸又四郎は堤防を造り荒井川の水害に苦しめられていた人々が救われた。現在も高砂市美保里には市丸廟の額が掲げられたい市堂が弁天堂と同じ敷地に堂には市丸の事績を記した碑文と「恵光院浄慶」と記された墓碑が納められている。	不詳
109		兵庫県	豊岡市	兵庫県豊岡市	赤木正雄	全国治水砂防協会の設立者。立山の砂防工事、阪神大水害復旧に伴う六甲山砂防工事を指揮するなど、国内砂防技術の基礎を築いた日本での砂防の重要さをいち早く説いた人物で「砂防の父」といわれる。	全国治水砂防協会の設立者。東京帝国大学農学部林学科砂防に学び、林学出身者ではじめて内務省に就職。鬼怒川、信濃川、木津川、瀬田川、富士川、神通川、天竜川、六甲山など全国の砂防工事を指揮するなど、国内砂防技術の基礎を築いた。日本での砂防の重要さをいち早く説いた人物で「砂防の父」といわれる。	1887年～1972年
110		兵庫県	加古川市	兵庫県加古川市	長浜新六郎	加古川の水害に悩まされ続ける人々を見かね、私財を投じ、洪水の際に避難できる山を1756年に完成させた。のちに築山神社が建てられた。	国包出身の商人だった長浜新六郎は、加古川の水害に悩まされ続ける人々を見かね、私財を投じて洪水の際に避難できる山を天保六年（一七五六年）に完成させた。その山は人の手で築かれたことから築山と呼ばれ、その頂上に地元の人々が感謝の気持ちと安全への祈りを込めて築山神社を建てたといわれている。	不詳
111		奈良県	大和高田市	奈良県大和高田市	中川吉造	11年にも及ぶ大工事である高田川の付け替え工事を指揮する。この工事により、水害が減り大和高田市の発展に貢献する。水道の敷設工事にも協力する。	明治29年、帝国大学工科大学土木工学科卒。内務省技師となり地方土木工事の監督と利根川改修にあたり大正15年利根川の改修工事を完成させ、約40年間、利根川改修工事に尽力した、「利根川の主」と称される。昭和7年から11年間で費やし、高田川の付け替え工事や、水道の敷設工事に助力を惜しなかった。	不詳
112		和歌山県	橋本市	和歌山県伊都郡	大畑才蔵	水利事業に大きな貢献をし、小田井用水路、および藤崎井用水路の紀の川から引水した大規模かんがい用水・疏水工事を行った人物として知られる。	水を雨水や渓流水に頼る紀の川右岸一帯の農民たちは、紀の川の水を自分の水田に引くことができたらの願いに工事に取り掛かりました。地形が複雑で難しい工事を他にも完成させた才蔵が作った二十四キロメートルの藤崎井用水路や完成はできなかったものの三十キロメートルの小田井用水路は現在も使われています。	1642年～1720年
113		和歌山県	和歌山県有田郡	和歌山県有田郡	濱口梧陵	「稲むらの火」のモデルである。安政南海地震により壊れた橋や津波から人を守るための広村堤防を私財を投じて修復する。このことを小泉八雲が小説にし、「生ける神」と書いた。	安政南海地震の津波が広村に襲来した後、梧陵は自身の田にあった藁に火をつけ高台の広八幡神社への避難路を示す明かりとし村人を誘導した。村人の9割以上を救い、津波から命を救うには情報伝達の速さにが重要という教訓を残した。これをもとに作られた物語が『稲むらの火』として知られている。	1820年～1885年

114	和歌山県	御坊市	和歌山県御坊市	柏木浅右衛門	干ばつによる飢饉に苦しむ村人のために、ため池造りを決心し、私財を投じて完成へと尽力するも志半ばにして逝去する。柏木浅右衛門の死後3年後に新池が完成する	浅右衛門は段々田んぼでの重労働や干ばつに悩み・飢饉に苦しむ人々の生活を見て成長した。彼は東谷に溜め池をと一念発起し、私財一切を投げだし、労力総てを奉仕して池普請に情熱を傾けた。はじめは 半信半疑の村人も彼の姿に励まされ一万有余の人々が、伊勢参宮講を結成して経費をとのえ、大事業に着手した。	？年～1834年
115	和歌山県	御坊市	和歌山県御坊市	栗本新兵衛	天保の大飢饉のために多くの人が飢え死にすることになった。栗本新兵衛は貧しい人を救うために日高川沿岸を埋め立てる工事を私財を投じ行っった。これにより新田が開発できるようになり、新しくできた新田は「茶新新田」と呼ばれる。	天保の大飢饉のために多くの人が飢え死にすることになった。栗本新兵衛は貧しい人を救うために日高川沿岸を埋め立てる工事を私財を投じ行っった。人々はこの工事により仕事を得ることもできた。また、これにより新田が開発できるようになり、新しくできた新田は「茶新新田」と呼ばれる。	不詳
116	和歌山県	御坊市	和歌山県御坊市	鈴木立庵	水が少ないため、水田がわずかしかない土地に2000メートルもの灌漑用水路を私財を投じて造る。このことにより、岩内・熊野に新しく水田が造られた	鈴木立庵は段々田んぼでの重労働や干ばつに悩み・飢饉に苦しむ人々の生活を見て成長した。彼は東谷に溜め池をと一念発起し、私財一切を投げだし、労力総てを奉仕して池普請に情熱を傾けた。はじめは 半信半疑の村人も彼の姿に励まされ一万有余の人々が、伊勢参宮講を結成して経費をとのえ、大事業に着手した。	不詳
117	和歌山県	御坊市	和歌山県御坊市	平井正次	日高川沿いの土地は堤防が十分でなく豪雨のたびに荒れていた。荒れ地を改良すべく土地に水を引き、若野井堰を造り荒れた土地を水田へと変え石高を増やした	一六〇〇年初めの土木技術では、日高川近辺の低い土地は畑地が多く水田化されておらず、河川が荒れればたちまち氾濫するため流域は耕作人不明の荒地となっていた。正次は川辺町若野杵本で日高川を堰き止め、二百六十町歩を灌漑、水門より水末に至る溝渠延長約一里二十町の若野井堰を設計し工事を指揮し完成した。	1580年～1657年
118	鳥取県	鳥取県鳥取市	島根県松江市	亀井 茲矩	大井手用水の祖 1600年(慶長5年)から7年の歳月をかけて、延長16キロメートルにも及ぶ「大井手用水路」を造り、その後、荒れ地や畑の開墾を行った結果、千代川西側には、当時、1,200ヘクタールもの穀倉地帯が造られました。	茲矩は慶長7年から大井手用水路の開設に取組み、千代川の川筋に取水堰(智頭川と八東川の合流点の上約一km)を設けて水源とし、水路は河原から江津・秋里・湖山に及ぶ約20km余で千代川の西側には灌漑面積は約千町歩に及びます。施工には7年の歳月を要したと言われています。	1557年～1612年
119	島根県	出雲市	島根県出雲市	大梶七兵衛	日本海に面した荒木浜(出雲市大社町)一帯の砂丘が、海から吹き付ける強い西風に加え、水にめぐまれないために作物ができず、自然の荒らすままになっているのを見て心を痛めました。そして、自分の私財を投げ出しても、この地の開拓を成しとげようと決意を固めました。用水路を通す土地は、砂地のため水が地面に吸い込まれてしまいます。そこで、川床にむしろを敷き、粘土で固めて水が漏れないようにしました。こうして、川幅約6メートル、全長約8キロメートルの用水路(高瀬川)ができあがりました	海から吹き付ける強い西風に加え、水に恵まれず作物ができないことに心を痛め、私財を投げ出してもこの地の開拓を成しとげようと決意。用水路を通す砂地の土地は水が地面に吸い込まれるため、川床にむしろを敷き粘土で固め水が漏れないようにした。こうして幅約6メートル、全長約8キロメートルの用水路ができあがった	1621年～1689年
120	島根県	松江市	島根県松江市	周藤彌兵衛	日吉村(現・松江市八雲町)を流れる意宇川は洪水を繰返す暴れ川だった。宝栄3年(1706年)、56歳にして一念発起した周藤彌兵衛は、岩山の剣山を切り抜き、川の流れを変える工事に取りかかった。以来42年間、くる日もくる日も槌とノミで岩を切り開くという苦業に立ち向かい、ついに延享4年(1747年)、97歳にして「日吉切通し」を完成させ、意宇川の流れを変えることに成功した。宝暦2年(1752年)、周藤彌兵衛は102歳で大往生をとげた。	宝栄三年、五六歳にして一念発起した周藤彌兵衛は日吉村の剣山を切り抜き、以来四二年間ノミと槌で剣山の硬い岩を切り開くという苦業に立ち向かった。九七歳にして「日吉切通し」を完成させ、意宇川の流れを変え洪水を繰り返す暴れ川から村を救った。宝暦二年、一〇二歳で大往生をとげた。	1650年～1752年
121	島根県	安来市		ト蔵孫三郎	江戸中期、私財をなげうって不毛の池を埋め立て、5ヘクタールの広大な水田を開発したト蔵孫三郎。	ト蔵孫三郎は、江戸時代中期、仁多郡から荒島村に移住し、庄屋の協力を取り付けて能義郡目白池でト蔵新田の開発を行った。沼地であった目白池に16年の歳月をかけて五ヘクタールの水田に造成、かんな流し工法を使った土砂運搬方法を用いて、優れた土木技術と才能をふるって新田開発を行い生涯を全うした。	1696年～1721年
122	島根県	松江市		清原太兵衛	出雲松江藩士。普請方吟味役。宍道湖から日本海に注ぐ松江市内の佐陀川は、松平松江藩七代藩主治郷(不味)の時代に開削された川。度重なる洪水に見舞われていた松江城下と宍道湖周辺の被害対策に、湖水を日本海に流し、被害を緩和させるといったものだった。排水路の開削を藩主松平治郷(はるさと)に進言し、普請奉行に登用される。天明5年から全長約12kmの水路(佐陀(さだ)川)をほりすすめた。結果、宍道湖の水位は1m下がりがり開発された新田は200ヘクタールと伝えられている。川沿いで米が増産されるようになると、河口付近には藩の御番所や米蔵が置かれ、通行税の徴収や上納米の集荷業務が行われた。また、他藩との交流が盛んになると船宿も誕生、海運業が盛んになった。船は干しアワビやスルメ、ハゼロウ、まき、炭などあらゆる物資を積み込み、佐陀川を往来。このころを境に、それまで財政難に陥っていた藩の台所事情は好転したといわれている。開通式を1カ月後に控えた1787年(天明7)年11月28日、76歳にして死去。	度重なる洪水に見舞われていた松江城下と宍道湖周辺の水害対策に湖水を日本海に流し被害を緩和しようと考え、佐陀川を開削。天明5年から全長約12kmの水路を掘りすすめた結果、宍道湖の水位は1m下がりがり200ヘクタールの新田を開発。川沿いでは米が増産、海運業も盛んになり藩の財政事情は好転した。	1712年～1788年
123	島根県	松江市	スコットランド エディンバラ	ウィリアム・K・バー	日本の衛生工学・上下水道の父。松江市他23都市の近代水道が完成。バルトンの設計は、実地工事上の段階で大幅に変更せざるを得ないものではあったが、帝都上下水道の基本計画となり、東京、神戸、福岡、岡山などの上下水道の基本調査を担当した。凌雲閣の基本設計者でもある。	日本の衛生工学・上下水道の父。松江市他二十三都市の近代水道を完成させました。バルトンの設計は、実地工事の段階では大幅に変更せざるを得ないものではありませんでしたが、帝都上下水道の基本計画となり、東京、神戸、福岡、岡山などの上下水道の基本調査を担当しました。凌雲閣の基本設計者としても知られています。	1856年～1899年

124	中国	岡山県	岡山市	岡山県岡山市	津田永忠	「2,800ヘクタールを超える新田を開いた」 岡山の城下を流れる旭川は川が浅く、たびたび、洪水の被害が発生しました。また、米の取れる量も現在に比べ少なく、日照りや洪水により饑もたびたび、起こっていました。旭川の洪水を防ぐため、新たな川を掘ることを考案し、1669年に蕃山の弟子の津田永忠により川の掘削が行われ、現在の百間川ができました。	岡山の城下を流れる旭川は川が浅くたびたび洪水の被害が発生した また米の取れる量も現在に比べ少なく日照りや洪水により饑もたびたび起こっていた 旭川の洪水を防ぐため新たな川を掘ることを考案し1669年に蕃山の弟子の津田永忠により川の掘削が行われ現在の百間川ができた。	1640年～1707年
125		岡山県	岡山市	岡山県岡山市	石川善右衛門	江戸前期の水利土木家。承応3(1654)年7月備前各地に大水害が発生、藩主池田光政の命を受け被害が激しかった児島郡の救済に当たった。各地を視察し、旱水害の地児島郡に福林池、森池をはじめ、郡内各地に300余の池を造成し、旱害の憂いを除いた。後年の文化3(1806)年郡民によって瑜伽山に頌徳の記念碑が建てられた。	江戸前期の水利土木家。承応3(1654)年7月備前各地に大水害が発生、藩主池田光政の命を受け被害が激しかった児島郡の救済に当たった。各地を視察し、旱水害の地児島郡に福林池、森池をはじめ、郡内に300余の池を造成、旱害の憂いを除いた。文化3年)年郡民にて瑜伽山に頌徳の記念碑が建てられた。	1607年～1670年
126		岡山県	岡山県岡山市	オランダ ライデン	アントニー・トーマ	児島湾干拓調査にあたり彼は、この地方の伐採され荒れ果てた山々を見て驚き、このままでは、土砂流出、洪水の害は治まらず、古田の湿田化も止められないとし「児島湾開墾復命書」のなかで、干拓工事の手順や工法だけでなく、伐採の禁止と河川上流部での砂防の必要性を強く説いた。	児島湾の干拓調査にあたり、ムルデルはこの地方の伐採で荒れ果てた山々を見て驚きました。このままでは、土砂流出、洪水の害は治まらず、古田の湿田化も止められないとし「児島湾開墾復命書」のなかで、干拓工事の手順や工法だけでなく、伐採の禁止と河川上流部での砂防の必要性を強く説きました。	1848年～1901年
127		岡山県	久米南町	岡山県久米南町	河原善右衛門	江戸時代の寛永8(1631)年に、現在の久米南町下弓削に生まれ、長じて大庄屋となり貧困にあえぐ農民たちを何とか救済したいと発念。干天の水不足、洪水など、天候に翻弄される郷土の農業改革を目指して、河川の改修、田畑の開墾・灌漑施設づくりなど、数々の大事業に私財を投じて取り組みました。	江戸時代の寛永8年(1631年)に、現在の久米南町下弓削に生まれ、長じて大庄屋となり貧困に苦しむ農民を何とか救済したいと発念。干天の水不足、洪水など、天候に翻弄される郷土の農業改革を目指して、河川の改修、田畑の開墾・灌漑施設づくりなど、数々の大事業に私財を投じて成し遂げた。	1637年～1685年
128		広島県	安芸高田市		咽声忠左衛門	矢櫃井堰を切り開いた 江戸時代、安芸高田市八千代町上・中土師地区は、川よりも高いところにあるため、この水を田畑に利用できず、しばしば水不足でお米を収穫できなくて困っていました。上流から水を引くための用水路を作り約8キロメートルの水路が掘られ、約18.6ヘクタールの田畑に水を送ることができました。	江戸時代、安芸高田市八千代町上・中土師地区は、川よりも高いため、川の水を田畑に利用できず、しばしば水不足で米を収穫できず農民たちは困っていた。忠左衛門は上流からの水を引くハキロメートルもの用水路を掘り続け、約18.6ヘクタールの田畑に水を送る矢櫃井堰を切り開いた。	不詳
129		広島県	尾道市	尾道市	山口玄洞	関西や尾道の公共事業や慈善事業、寺社に寄付した。大正・昭和における寄付金王とまで言われている。記録に残る主なものだけでも147件の寄付・寄進をしている。初期は特に教育関係、ついで病院・水道などの社会事業関係、そして災害の義捐関係が目につく。	関西や尾道の公共事業や慈善事業、寺社に多くの寄付をした。大正から昭和における寄付金王とまで言われている。記録に残る主なものだけでも147件におよぶ寄付・寄進をしている。初期は特に教育関係、ついで病院・水道などの社会事業関係、そして災害の義捐関係なども目立った。	1863年～1937年
130		広島県	広島市	安佐南区	桑原卯之助	江戸時代の始めごろ、八木・緑井・長束などの安佐南区の太田川右岸は、農業用水に乏しく、稲作に適さなかったため、そば・大豆・粟などの雑穀に頼って生活していました。水車や井戸・堰を作って用水を確保しようとしたが、どれも失敗に終わりました。卯之助は、太田川の水を引き入れることを思いつき、用水路の掘削に取りかかりました之助は、何度も調査を重ね、緻密な傾斜角の計算をし、八木の十歩一を取水口に決め1768年にやぎ用水が完成	江戸時代初期、八木・緑井・長束など太田川右岸地域は農業用水が乏しかったため稲作に適さず、そば・大豆・粟などの雑穀に頼って生活していた。卯之助は、太田川の水を引き入れる用水路の掘削に取り掛かり、調査を重ねて八木の十歩一を取水口に決め、一七六八年に定用水が完成した。	1723年～1783年
131		広島県	福山市		水野勝成	福山藩初代藩主。芦田川デルタの干拓による城下町の建設をはじめ、綿花栽培の奨励による繊維産業の育成や上水道の敷設、戦国時代以来荒らされていた神社仏閣の修理・再建など、領内の治政に力を尽くしている。城下町建設と同時に、上水道網(福山旧水道)を整備。また、城下町を氾濫から守るため、芦田川の治水・灌漑・利水事業も行った。	福山藩初代藩主。芦田川デルタ干拓による城下町建設をはじめ、綿花栽培の奨励による繊維産業育成や上水道の敷設、戦国時代以来荒れていた神社仏閣の修理・再建など領内の治政に力を尽くした。城下町建設とともに、上水道網(福山旧水道)を整備。また、城下町を氾濫から守るため、芦田川の治水・灌漑・利水事業も行った。	1564年~1651年
132		山口県	周南市		岩崎想左衛門	鹿野の命を拓いた 鹿野台地は、周辺の錦川や渋川よりも高台にあるため、村人たちは毎日遠くに水汲みに行っていました。これを見た岩崎想左衛門重友は、なんとかこの台地に水を引き、村人の生活を楽にしようと考えました。	鹿野台地は周辺の錦川や渋川よりも高台にあるため村人たちは毎日遠くへ水汲みに行っていた。これを見た想左衛門重友は、なんとかこの台地に水を引こうと考えたそこで、藩の許可を受けた想左衛門重友は(慶安4年)私財を投じて村人と工事を始めた 工事を始めて4年後、村人と協力し約90mのトンネルが完成した	1598年～1662年
133		徳島県	阿波市	徳島県阿波市	井内恭太郎	江戸時代から吉野川流域の農地ではたくさんの藍が作られていました。明治30年代以降、化学染料の輸入等によって、藍は急速に衰退してきました。農家の人たちは、藍にかわってお米を作りたいと思いましたが、たくさんの水が必要となるために、当時はお米を作ることができませんでした。吉野川から農地まで水を引いてくること(用水路の建設)を考え、反対する人たちを説得し、優れた工事技術によって、吉野川の北には「板名用水」、南には「麻名用水」という二つの大きな用水路を、約7年をかけてはば同時期に完成させました。	江戸時代から吉野川流域の農地ではたくさんの藍が作られていた。明治三十年代以降、化学染料の輸入等により藍は急速に衰退。藍にかわりに米作りを考えるも水の確保が困難だった。井内は、吉野川から農地まで水を引く用水路の建設を考え、七年をかけ吉野川の南北に大きな用水路を同時に完成させた。	1854年～1934年
134		香川県		静岡県浜松市	西嶋八兵衛	讃岐平野は古来降雨が極めて少なく、農民たちは水の確保に苦労してきました。日照りが続くと水に困窮し、大雨になると鉄砲水が民家や田畑を押し流し被害を出すという讃岐において、治水利水事業は急を要するところでした。農業用水確保のため、讃岐のため池の築造・改修に活躍しました。	讃岐平野は降雨が極めて少なく、農民たちは水の確保に苦労してきた。日照りが続くと水不足に困窮し、大雨になると鉄砲水や洪水が民家や田畑を押し流し被害を出すという讃岐において、治水利水事業は急を要していた。八兵衛は干ばつを救うため讃岐へ派遣され、農業用水確保のため、讃岐のため池の築造・改修に活躍した。	1596年～1680年
135		香川県	高松市 東かがわ市	香川県東かがわ市	久米通賢	1824年(文政7年)、このころ、財政難に陥っていた高松藩の第9代藩主松平頼恕は、通賢の才能を見込んで財政再建を頼った。通賢はこれに応えて阿野郡坂出の浜に新たな塩田を開発することを進言。1826年(文政9年)、高松藩はこの案を採用し、通賢は塩田開発の陣頭指揮を執るだけでなく、自ら率先して作業に参加したため工夫達の士気も上がり、工事ははかどった。ところが高松藩の財政難は深刻で、途中から塩田開発工事資金がとどこおるようになった。通賢は工事を完成させるため、私財を投入して工事を継続させた。	財政難に陥っていた高松藩の第九代藩主松平頼恕は、通賢の才能を見込み財政再建を頼った。通賢は阿野郡坂出の浜に新たな塩田開発を進言。高松藩はこの案を採用し通賢は塩田開発の陣頭指揮を執るだけでなく、自ら率先して作業に参加した。藩の財政難により資金が滞ったため、私財を投入し工事を継続させた。	1780年～1841年

136		香川県	高松市	香川県高松市	藤川三溪	1817ー1889 幕末一明治時代の医師、水産開発者。維新後は捕鯨のために開洋社を設立、また東京に大日本水産学校、大阪に大阪水産学校を創立するなど、水産事業につくした。	讃岐の国山田郡三谷村(高松市三谷町)に生まれ、幕末から明治時代の医師であり、水産開発者として功績を残した。維新後は捕鯨の事業化を計画し、開洋社を設立。奥羽征討軍監察使として功を立て、明治十四年に公務を退職した。また東京に大日本水産学校、大阪に大阪水産学校を創立するなど、水産事業に生涯を捧げた。	1817年～1889年
137	四国	香川県	観音寺市	香川県観音寺市	加地茂治郎	大正13年(1924)の夏、香川県は厳しい日照りに襲われた。瀬戸内海に面した香川県は元々雨が少なく、昔からため池をつくって作物を作ってきたが、この日照りによって、池の水は枯れ、水田はひび割れ、イネはたちがれ、農民たちは飲み水にも困るほどだった。池をつくるようにとの農民たちの訴えに茂治郎は杵田川(くにたがわ)をせき止めるダムの建設を計画した。国や県議会に出向き、工事費用の負担を交渉、また、貧しい農民のため、農民の収入となるように工事は地元の農民たちで行うことにした。	大正十三年、香川県は厳しい日照りに襲われた。元々雨が少なく、昔からため池をつくって作物を作っていたが、日照で池は枯れ、農民たちは飲み水にも困るほどだった。農民の訴えに茂治郎は杵田川をせき止めるダム建設を計画。国や県議会に費用負担を交渉し、貧しい農民の収入となるよう工事は地元の農民たちで行った。	1869年～1940年
138		香川県	善通寺市	讃岐国多度郡屏風浦	空海	僧侶としてだけではなく、建築や治水など実利の面でも高い能力を示した。その中で最も大きな功績といえるのが、讃岐の国にある満濃池である。この池は国内最大級のため池で、当時からの地域では農業用水として活用されていた一方で、大雨などにより度々決壊し、甚大な被害も出していた。空海はこの池にアーチ状の堤防を築き、氾濫を防いだ。	僧侶としてだけでなく、建築や治水など実利の面でも高い能力を示した。その中で最も大きな功績が讃岐の国にある満濃池。この池は国内最大級のため池で、当時からの地域では農業用水に活用されていたが、大雨などにより度々決壊し甚大な被害を出していた。空海はこの池にアーチ状の堤防を築き氾濫を防いだ。	774年～835年
139		愛媛県	久万高原町	兵庫県姫路市	山之内彦左衛門	久万盆地を流れる久万川は、深い谷となっているため、そのままでは水田に水を引くことが出来ず、人々は川の上流にせきをつくり、そこから数十もの「掛樋※」を連ねて農業用水を引いていました。台風や大雨の洪水によって、掛樋はたびたび流されました。急いで掛樋の修理をするのですが、その苦労は大変なものでした。この苦しみから人々を救うため、掛樋の代わりに岩山を切り開いた用水路をつくる工事に着手しました。	久万盆地を流れる久万川は深い谷のため、農業用水を引くため川の上流に堰をつくり、そこから数十もの「掛樋」を連ねて水を引いていました。台風や大雨の洪水によって、掛樋はたびたび流されその苦労は大変なものであった。この苦しみから人々を救うため、掛樋の代わりに岩山を切り開き用水路を築いた。	1614年～1698年
140		愛媛県	松山市	岐阜県	足立重信	藩きっての土木技術者だった足立重信は、松山城を築くにあたって、当時あちこちに氾濫して流路の定まらなかった伊予川(いよがわ)(重信川)を固定し、川幅を広げて強固な土手を築きました。これによりこれまで荒廃地であった約50haの新田が拓かれたほか、周囲の約5000haもの水田が水利の恩恵に浴しました。当時、城を作る勝山の南麓(なんろく)を抜け、幾度となく洪水を繰り返す暴れ川であった石手川(いしてがわ)を南(現在の流路)へ付け替えさせました。	松山城主 加藤嘉明に仕え、藩きっての土木技術者だった足立重信は、当時あちこちで氾濫していた伊予川(重信川)の河道改修を行い、荒廃地だった地域に五十ヘクタールの新田を拓いた。当時城を作る勝山の南麓を抜け、洪水を繰り返す暴れ川だった石手川(いしてがわ)を南(現在の流路)へ付け替えさた。	生年不詳～1625年
141		高知県	高知市	姫路市	野中兼山	高知平野の水田開発を拓いた。江戸時代初期には、台風による洪水などにより、見渡す限り荒涼とした大地が続き、当時の我が国において、土佐は辺境の貧しい国の一つに数えられていました。そのような土佐を、信念をもって藩政の改革に取り組み、かんがい用水と新田開発を強力に押し進めた。	八田堰、山田堰などの堰及び用水路の建設による新田開発や日本最初の掘り込み港湾「手結内港」など多くの新田開発や港湾設備建設を行い、「土木神の化身」と呼ばれるほどの土木工事を行った。四万十川支流に分水目的の井堰を設け、四ヶ村を灌漑するために水車を設置し水田に水を汲み上げる工事も行った。	1615年～1663年
142		福岡県	朝倉市	福岡県朝倉市	古賀百工(こが ひゃっこう)	大干ばつが起こりこれを機に筑後川から水を引くための用水工事が行われ翌年には水田を潤す堀川用水が完成した。その後拡張を藩に願い出し認められ完成。根本的に水害干害から住民を守るために堰の大改修を実現した。	日照りが続くとも稲も立ち枯れ、作物も取れず何度も飢饉に陥る地域を救うため筑後川からの豊富な水を引くための用水工事が行われ、翌年には水田を潤す堀川用水が完成した。その後拡張を藩に願い出し認められ筑後川本流山田堰の大改修を実現。根本的に水害干害から住民を守り農民に大きな恩恵を与えた。	1718年～1798年
143		福岡県	久留米市	福岡県筑後市	高山六右衛門(たかやま ろくえい)	筑後川北岸の床島で大干ばつがあり農作物が全滅となった時に用水路を作る計画を提出し許可され完成してからも堰を作るなどの拡張を粘り強く続け今でも地域に恵みをもたらしている	大干ばつによってたびたび農作物が全滅していた久留米の水不足を解消するため、筑後川北岸の床島に堰を築くことを久留米藩に請願するとともに郡内の庄屋からの協力も得、久留米藩士草野又六の指揮のもとで工事に着工し、正徳四年に床島堰を完成させた。床島堰によって田畑約二千ヘクタールを潤した。	生年不詳～1734年
144		福岡県	柳川市	滋賀県高島市	田中吉政	江戸時代の筑後国主。筑後川沿岸住民は洪水により荒野になってしまうのが悩みだった。筑後川河畔にある葦野を開拓して耕地の拡張を命じ、自らも海岸埋立を企画し、汐土居の築堤に着手した。また、筑後川の流れを深くして舟運の便をはかった。さらに国内各所の城壁を撤去し田畑にしたといわれている。	江戸時代の筑後国主。筑後川沿岸住民は洪水により荒野になってしまうのが悩みだった。筑後川河畔にある葦野を開拓して耕地の拡張を命じ、自らも海岸埋立を企画し、汐土居の築堤に着手した。また、筑後川の流れを深くして舟運の便をはかった。さらに国内各所の城壁を撤去し田畑にしたといわれている。	1548年～1609年
145		福岡県	豊前市	福岡県豊前市	高橋庄蔵	県議会議員になり地元の問題解決として水を供給するための池を作ろうと11年間動いた。完成を待たずに帰らぬ人となったが今も矢方池は地域の水田を潤し、農民は用水に困ることなる秋には豊かな実りを得ています。	天保7年上尾郡路土村(現在の豊前市黒土)で代々庄屋を務める家系に生まれた。明治6年からは上毛・下毛二郡の大区長をつとめた。明治十一年に灌漑用の矢方池の築造を計画した庄蔵は、十年の歳月をかけて水利土工会を創立。私財を投じ明治二十一年に着工したが三年後に五十六歳で急死、池はその十年後に完成した。	1836年～1891年
146		福岡県	筑前町	福岡県筑前町	長卯平	江戸時代に戸原村大庄屋を務めた長は、水利に恵まれない郡の山に新大間池仕掛水路を作ることとを計画し7年で完成させ、尚且つ、私財を応じて地域に貢献したその偉業は、今も生活に恩恵を与え続けている。	江戸時代に戸原村の大庄屋を務めた長卯平は、水利に恵まれない郡の中央部に山を掘り抜き灌漑水路、新大間池仕掛水路を作ることとを計画し、同地出身の博多の豪商からの援助をうけるだけでなく、私財も投じて七年で完成させた。地域に大きく貢献した長卯平の偉業は今も生活に恩恵を与え続けている。	1759年～1837年
147		福岡県	大刀洗町	福岡県久留米市	草野又六	土木工事の技術にすぐれ、久留米藩士にとりたてられる。筑後川北岸地区の三井郡一帯の土地は川面より高く水田として利用されず、わずかな田畑もたびたび干害に襲われ、農民は飢饉に迫られる状態であった。床島堰と恵利堰の建設工事を指揮して正徳4年完成させ新田約400haをひらいた。	土木工事の技術にすぐれ、久留米藩士にとりたてられる。筑後川北岸地区の三井郡一帯の土地は川面より高く水田として利用されず、わずかな田畑もたびたび干害に襲われ、農民は飢饉に迫られる状態であった。床島堰と恵利堰の建設工事を指揮して正徳4年完成させ新田約400haをひらいた。	1678年～1731年
148		福岡県	うきは市	福岡県うきは市	田代弥三左衛門(たしろ やそざえい)	筑後生葉郡吉井村の大庄屋。郡東部の荒れ地に筑後川の水をひく用水路の開削を計画し、寛文12年久留米藩の援助をえて工事を開始。久留米藩より借りた33貫目を使い果たし9貫目ほどに手を出し、思うほど水量が無かった為更に数十貫目の私財を投げうつなどして延宝4年袋野堰の通水に成功した。	筑後生葉郡吉井村の大庄屋。郡東部の荒れ地に筑後川の水をひく用水路の開削を計画し、寛文12年久留米藩の援助をえて工事を開始。久留米藩より借りた33貫目を使い果たし9貫目ほどに手を出し、思うほど水量が無かった為更に数十貫目の私財を投げうつなどして延宝4年袋野堰の通水に成功した。	1616年～1687年

149	九州	佐賀県	佐賀市	佐賀県佐賀市	成富茂安	川が大雨が降ると洪水となり農民たちは水不足に苦しんでいた。そこで石井堰という施設を考え建築し、その後洪水被害も治まり田畑に必要な水量も確保でき農作物の収穫も安定した。治水の神様と呼ばれている。	現在の佐賀市鍋島町に生まれた成富茂安は、堤防、井樋、用水路、ため池など100数力所の事業に携わり、利水開発や洪水防止事業を進め、治水の神様と呼ばれた。佐賀平野の嘉瀬川は、洪水や水不足に苦しんでいた。そこで石井堰という施設をつくり洪水を防ぎ、田畑に必要な水量を確保して農作物の収穫を安定させた。	1560年～1634年
150		長崎県	波佐見町	長崎県波佐見町	深澤儀太夫 (ふかざわ・ぎだけ)	くじらとりをしたお金で新田やため池を造って寄付していた。なかでも野岳村は雨で川はあふれ、日れば水がなくなっていたので大きな堤を作ればいいと考え野岳湖が完成し豊かになり村人を救った。	当時、九州のまわりの海では鯨が沢山捕れ、儀太夫は捕鯨で大金持ちとなった。そして、捕鯨をして儲けた金で新田や溜池を造って寄付していた。中でも野岳村は雨が降ると川が溢れ、日照りにが続くと水が無くなり作物の被害が頻繁に起こっていた。これを防ため大きな堤を作ろうと考え野岳湖をつくり多くの村人を救った。	1584年～1663年
151		長崎県	長崎市	長崎県長崎市	倉田次郎右衛門	長崎の町は元々水源に乏しく、生活用水や非常時の消火用水の不足が問題になっていた。寛文3年(1663年)の大火の際に水不足を痛感した次郎右衛門は、長崎のための水道を造ることを決意。寛文7年(1667年)、許可を得て中島川の上流の現・伊良林1丁目付近の銭屋川を水源とする水道の敷設工事に着手した。多額の工費が必要となり、次郎右衛門が私財のほとんどを売却しても足りなかったため長崎奉行も白銀300枚の資金援助をした。水道が完成したのは延宝元年(1673年)のことであった。明治24年(1891年)に日本初の上水用ダムである本河内高部ダムが完成するまで、倉田水樋は200年余りにわたって長崎の住民に水を供給し続けた。	生活用水や非常時の消火用水の不足に倉田次郎右衛門が私財を投じて水道の敷設工事を行った。寛文3年工事を決意し、寛文7年銭屋川を水源とする水道の敷設工事に着手、延宝元年水道工事完成。倉田次郎右衛門は200年余りにわたって長崎の住民に水を供給し続け長崎の生活を支えた。	生年不詳～1703年
152		熊本県	熊本市	愛知県名古屋市	加藤清正	肥後北半国の領主として来た加藤は暴れ川と呼ばれる白川が田畑に洪水を与え大被害をおわせていることを無くそうと、堀替えや堰・井出や石剝を作るなどの工夫をして田畑を豊かにした。	秀吉にとりたてられ二十六歳の若さで肥後北半国の領主となった清正は、当時暴れ川と呼ばれた白川は、何度も熊本城下を襲っていた。清正は川の上流から河口まで見回り白川の洪水により田畑が大きな被害を受けないよう、堀替えや堰・井出や石剝を作るなど様々な工夫をして田畑を豊かにし、今の熊本の礎を築いた。	1562年～1611年
153		熊本県	山都町	熊本県	布田惟暉	養父布田太郎右衛門の土木治水事業の影響をうけ、嘉永7年に通潤橋(石造アーチ型の通水橋で国の重要文化財)を完成させるなど、橋・道路を建設し矢部の開発に努めた。それにより天保の大飢饉から農民を救った。	肥後国矢部に誕生し、養父布田太郎右衛門の土木治水事業の影響をうけ、嘉永七年、阿蘇の外輪山南側の五老ヶ滝川の谷に通潤橋(石造アーチ型の通水橋で国の重要文化財)を完成させるなど、橋・道路を建設し矢部の開発に努めた。それにより天保の大飢饉から農民を救った。1952年には、熊本県近代功労者となった。	1801年～1873年
154		熊本県	熊本市	熊本県熊本市	千々波敬右衛門	水不足で村人が困っているのを見て、私財を投じて白川下流に大石堰をつくり、掘割を設け用水路とした。完成前に病死したが明治四年に用水路は完成し、村人に恵みを与えた。	江戸時代後期の治水家。肥後(熊本県)飽田郡に生まれた。水の確保が十分に行えず、たびたび水不足で村人が困っているのを見て、私財を投じて白川下流に大石堰をつくり、掘割をもうけて用水路を築く工事に着手した。水路が完成する前に工事途中で病死したが、明治四年に用水路は完成し村人に恵みを与えた。	不詳
155		熊本県	上益城郡益城町	熊本県上益城郡	富田茂七	その地域では土地が高く水利の便が悪く乾きやすい地面で村人は苦しい生活をしていた。その高低差を利用し用水路の工事を開始。工事していく中で失敗をしながらも負けることなく完成させ今でも一面に美しい田畑が広がっている。	かつて砥川村は、田地に使用する水の確保が困難な立地条件で当時の庄屋であった富田茂七は享和元年赤井の素麺滝から砥川へ水を引くため船野山の山麓をめぐる約3350mの水道を開削し荒田を良田へと変えた。この功績を称え大正14年に富田茂七彰徳碑が建立され、疎水式をおこなった3月19日には水神祭が行われている。	1760年～1837年
156		熊本県	玉名市	熊本県玉名市	櫻井又吉	土木技術に優れ、堤防を築き、水門をつくった。のちに村人は桜井祭をおこない、徳をしたった	江戸時代中期-後期の治水家。肥後(熊本県)玉名郡弥富(やどみ)村に生まれた桜井又吉は、若くして役人の道に進み、永徳寺村の庄屋など玉名郡代のもと要職に就いた。優れた土木技術をもとに村々のために働き、自費で堤防強化を行うなどして村人の生活を守った。毎年九月に又吉さんまつりを行い遺徳を偲んでいる。	1758年～1830年
157		大分県	日田市	大分県日田市	広瀬久兵衛	小ヶ瀬井路は総延長2,754m、日田市小ヶ瀬町の玖珠川から取水し、豆田町を抜け、再び玖珠川の支流に流れ込み、水田約500haを灌漑しています。この水路は日田市内を血管のように流れているため、日田市が水郷すいきょう日田と呼ばれる由縁となりました。	一八一六年頃、豊後日田地方に天災・地変が続き、大飢饉が襲った。収穫不良をなんとかしようと村人の協力を得て小ヶ瀬井路を完成した。日田の土木工事の後、県北地域の干拓事業を開始、周防灘沿岸の14新田と宇佐の広瀬井堰の工事にも関係した久兵衛は、毎日雨の日も風の日も土工と一緒に働いたといわれている。	1790年～1871年
158		大分県	宇佐市	大分県宇佐市	南一郎平	その地域は水不足で畑地としか利用されておらずお米を作るためにまず水を引くことと水利事業に取り組んだ。誰も不可能だった広瀬井手を完成させ人々を豊かにすることに生涯を捧げた。	幕末から明治にかけて大分県の広瀬井手、高森水路を開発。その後明治政府の水利開墾事業に従事し全国の水利土木工事にあたった。特に日本三大疏水とされる安積疏水、琵琶湖疏水、那須疏水の開発に取り組んでいる。疏水工事のなかで特にトンネル工事で経験を積みこの経験を生かして後にトンネル工事専門会社を創設した	1836年～1919年
159		大分県	中津市	大分県	内海作兵衛	承応三年藩命により中津城下に石の樋をうめ、上水道を敷設した。また、下毛郡樋田村の山国川から取水する荒瀬井路の建設を手がける。灌漑面積は28か村1000ha余におよんだ。	寛永元年生まれ。豊前中津藩の大工棟梁。承応3年藩命により中津城下に石の樋をうめ、上水道を敷設した。また下毛郡樋田村の山国川から取水する荒瀬井路の建設を手がける。荒瀬井路の灌漑面積は下毛原田地28か村、1000ヘクタール余に及び、莫大な費用と年月をかけた大分を代表する用水路である。	1624年～1706年

160	宮崎県	延岡市	宮崎県延岡市	藤江監物	岩熊井堰は、延岡市を流れる五ヶ瀬川にあります。江戸時代の中頃、農民たちは、水が少なく、米もなかなか取れず、貧しい暮らしをしていた。延岡藩家老の藤江監物は、1724年、水田へ水を引くために五ヶ瀬川に井堰をつくるよう、郡奉行の江尻喜多右衛門に命じた。 1731年に、家臣の策略によって監物親子4人が投獄されるという事件が起き、監物はその4ヶ月後に亡くなりました。 それでも工事は進み、監物が亡くなってから3年後の1734年、ついに岩熊井堰が完成しました。そして、水不足に苦しんでいた農民たちは救われ、工事前には150石しかなかった米の収穫量も755石まで増えました。や落差工、余水吐など坂本の高い技術力により完成しました。	江戸時代の中頃、農民たちは水が少なく貧しい暮らしをしていた。延岡藩家老藤江監物は、1724年、水田へ水を引くために五ヶ瀬川に井堰を造るよう命じた。1731年に、家臣の策略により親子4人が投獄され、その4ヶ月後に亡くなったが、亡くなってから3年後に岩熊井堰が完成。農民たちは水不足から救われた。	1687～1731年
161	宮崎県	都城市	宮崎県都城市	坂元源兵衛	農業用水が無く水田がない関之尾の人々から懇願され、庄内川の関之尾滝上流から水を引くため、ノミとツチだけで岩を掘り抜き約10年の苦難の末、1896年(明治29)に北前用水路を完成させました。この用水路は、自然の落差を利用した取水口や落差工(女滝)、余水吐(男滝)など坂本の高い技術力により完成しました。	農業用水が無く水田がない関之尾の人々から懇願され、庄内川の関之尾滝上流から水を引くため、ノミと槌だけで岩を掘り抜き約10年の苦難の末、1896年に北前用水路を完成させた。この用水路は、自然の落差を利用した取水口や落差工(女滝)、余水吐(男滝)など坂本の高い技術力により完成した。	1840年～1918年
162	宮崎県	三股町	宮崎県都城市	宮田盛儀	村会議員となり用水路開発による村勢の振興に意を注ぎ、水川から水路を引き水田を開いた。それからも水田を開いていき7年をかけて130ヘクタールに及ぶ広大な水田開発を成功させ、村人のために尽くした。	用水路開発による村勢の振興に意を注ぎ1905年沖水川から水路を引き長田地区に7町歩の水田を開いた。当時の農村では水田を増やすことが最も重要であった。次いで天木野地区に用水路を開発し20町歩の水田をさらに轟木地区に6町歩の水田を開き、水田稲作が可能となり耕地の生産力が高まり村の生活も豊かになった。	1876年～1963年
163	宮崎県	小林市	宮崎県小林市	田丸貞重	水利に恵まれなかった野尻町の畑地を水田にしようと自らの私財をつぎ込んだり努力しその結果三つの川から取水する大幹線用水路を県営工事で行い、用耕水路及び道路・開墾開田を行った。	昭和初期に野尻町で行われた開田事業があります。須木から水を引いた漆野原開田事業と小林から水を引いた野尻原開田事業。これらの工事は水不足に苦しんでいた野尻の農業に変革をもたらした。田丸貞重は三ヶ野山から東麓にかかる野尻原開田事業に、私財を投げ打って生涯を捧げました。	1875年～1932年
164	宮崎県	宮崎市	宮崎県宮崎市	黒木七左衛門	清武川支流の水路改修につとめ、新田を開発。また、正手の水路を整備し洪水をふせいだ	寛政8年、日向(ひゅうが)船引村(現在の宮城県清武町)の庄屋に生まれた。清武川支流の水路改修につとめ、新田を開発した江戸時代後期の治水家で、正手(しょうで)の水路を整備して洪水を防いだ。清武川の清流を引いてつくられたせせらぎはホテルの名所として知られている。	1796年～1873年
165	宮崎県	宮崎市	宮崎県宮崎市	松井儀長	私財を投じて水不足に苦しむ郡に川から水を引く方法を研究後、水路を完成させた	満潮時に大淀川が逆流するのを見て清武川の方が水位が高いことに気づき清武川から水を引くことを考えた。当時としては大事業であったこの事業は寛永16年12月に普請にとりかかり19年間の工事で全長は10kmにも及んだ。この事業によって農民たちは干ばつから救われただけではなく新開田を促すものとなった。	1570年～1657年
166	宮崎県	西都市	宮崎県西都市	児玉久右衛門	児玉久右衛門は、元禄2年(1689年)に穂北郷の庄屋の息子として生まれました。ところが、この地帯は水利の便が非常に悪く水が乏しい地域であり、取れるお米は年貢の10分の1程度で、先祖代々引き継がれた農地を手放す農家も少なくありませんでした。 これを見かねた久右衛門は、米良川(現一ツ瀬川)より水を引き、水田の造成を考え、藩の許可を得て、享保5年(1720年)に水路と井堰造りに着手しました。途中、出資者の変更、工事の妨害、洪水による堰の流失など幾多の問題がありましたが、享保7年(1722年)に第1期工事が完成し、14町歩(約14ha)を潤しました。寛延3年(1750年)に第2期工事が完成し、水田80町余(約80ha)をかんがいし、後に水田600町歩(約600ha)に達しました。その後、幾多の改修と昭和8年(1933年)及び昭和52年(1977年)の大改修により、現在の近代的頭首工が完成しました。	穂北郷は水が乏しい地域で、収穫できる米は年貢の一割程度だった。児玉久右衛門は藩から許可を得て、一七二〇年に水路と井堰造りに着手。工事への妨害、洪水による堰の流失などの問題があったが、一七二二年に第一期工事が完成、一七五〇年に第二期工事が完成し、水田約80hr灌漑。後に水田は約600hrに達した。	1688年～1761年
167	鹿児島県	有明町	鹿児島県有明町	野井倉甚兵衛	昭和16年に工事施工が決定され、翌年に水田520ha、畑100haの開墾計画で着手しました。途中、戦争により、一時は施工中止など困難な状況に陥りましたが、昭和24年に用水路が完成し通水式が行われました。そして、甚兵衛が81歳となった昭和28年に全ての工事が完成し、野井倉開田工事が終わりました。	20歳頃、干ばつで作物が枯れ、台風で深刻な被害を受けたことから、シラス台地に水を引く事を決意。以来、農林省への陳情や耕地整理組合の設立を行い、戦時体制下でも水路開削や開田工事を続けた。敗戦後、莫大な事業費用にGHQは難色を示したが、陳情を続け事業を続行、620haのシラス台地を潤す工事を完成させた。	1874年～1960年
168	鹿児島県	志布志市		馬場藤吉	東京で医者になっていて藤吉翁は、28歳の時蓬原に帰って馬場病院を開きました。荒れた台地に水を引き生活に苦しむ村人を助けてやりたいと明治45年に組合を作り組合長になりました。そして自分の財産を全て売って水を引く権利を譲り受け、大正7年430haの開田に成功しました。44歳のときでした。蓬原開田事業の停滞を自ら組合を作って立ち上がり灌漑した	蓬原開田に命をかけて働かれた馬場藤吉は28歳の時、蓬原に帰って馬場病院を開く。荒れた大地に水を引き生活に苦しむ村民を助けたいと明治45年に西志布志・大崎連合耕地整理組合を作り組合長になった。そして自分の財産を全て売って水を引く権利を譲り受け、44歳の時、430haの開田に成功した。	1875～1922
169	沖縄県	那覇市	沖縄県那覇市	蔡温	水田の里を拓いた 王府の自給体制を高めるため、殖産興業の振興を図り、農業の改良に取り組み、山林の保護育成を図った。	田と畑の転換を禁じ、また傾斜地の開墾を制限する一方で、農民に耕地の永久耕作権を与えて農地の地力保護をはかり、農業用水路の整備を進めた。また、農民を組合に所属させ、納税の連帯責任を負わせることによって農民同士の協力を促すとともに相互監視による収収の安定化をはかった。	1682年～1761年
170	台湾	台南市	石川県河北郡	八田與一	巨大な烏山頭ダムと恐ろしい程の長さの水路からなる嘉南大圳を設計・完成しました。	台湾の嘉南平野は灌漑設備が不十分だったため、十五万ヘクタール程の田畑は干ばつに見舞われていた。そこで與一は官田溪の水を堰き止め、さらに隧道を建設し曾文溪から水を引き込むダム建設を計画し認められた。事業は受益者が官田溪埤圳組合を結成し施行しこの組合付き技師となり完成に至るまで工事を指揮した。	1886年～1942年

171		台湾	宜蘭市	鹿児島県奄美大島	西郷菊次郎	宜蘭市では台風がくると川が洪水し住民が長年苦しんでいた。そこで多額の補償金を引き出し1年5ヶ月かけて堤防を築き洪水を止めた。	宜蘭市を流れる宜蘭川は人々の生活を潤す水源だったが、毎年のように氾濫し市民生活を脅かしていた。そこで菊次郎は巨費を投じて17ヶ月間かけて宜蘭川に堤防を作った。お陰で宜蘭の市民は水害から守られるようになった。1.7キロにおよぶ宜蘭川堤防は現在も「西郷堤防」と呼ばれ、業績を称える石碑も残されている。	1861年～1928年
172		アフガニスタン	ガンベリー砂漠	福岡県福岡市	中村哲	福岡県福岡市出身の脳神経内科を専門とする医師で、ベシヤワール会の現地代表やピース・ジャパン・メディカル・サービスの総院長として、パキスタンやアフガニスタンで医療活動に従事。2010年、水があれば多くの病気と帰還難民問題を解決できるとして、福岡県の山田堰をモデルにして建設していた、クナール川からガンベリー砂漠まで総延長25kmを超える用水路が完成し、約10万人の農民が暮らしていける基盤を作る。	福岡県福岡市出身の脳神経内科を専門とする医師で、パキスタンやアフガニスタンで医療活動に従事。2010年、水があれば多くの病気と帰還難民問題を解決できるとして、クナール川からガンベリー砂漠まで総延長25kmを超える用水路が完成し、約10万人の農民が暮らしていける基盤を作る。	1946年～2019年